

柱穴で柱のアタリを確認したが、直線的に柱列は並ばなかった。なお、本造構の柱穴は平面形を意識して、柱穴が掘られている印象を受けた。

また、P18から灯明皿として使用された土師器窓が完形で出土している。

所見 建物の軸線となる方位がほぼ同じであること、柱穴が多くの場合、内側から外側への重複であることから、B014aからB014bへの建替えと捉えられた。このため掘立柱建物跡としては、B014bが大きくなるものである。確認できた柱痕では、いずれの掘立柱建物跡でも白色粘土の混入が捉えられた。しかし内側のB014aに柱痕が残ることは、拡張・建替えに伴い掘立柱建物跡の内側に柱が残ることであり、矛盾が生じてくる。旧掘立柱建物跡の柱の切断により、柱痕が残されたとも考えられるが、今後の資料の増加をまって検討したい。

表57 B014遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	8.60×5.80×2.80 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	橙硬	雲母長石	完形	灯明皿 スス付着
2	土師器 壺	(14.8)×6.00×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ	黒～ 橙褐色 硬	雲母 長石 赤色	1/2	内墨

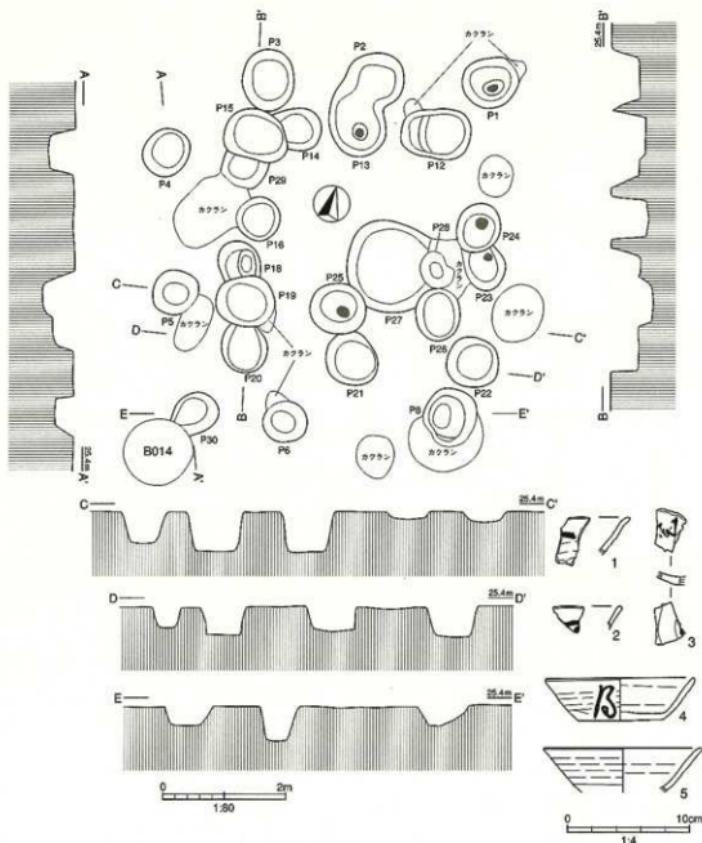


図241 B015a・b・c

表58 B015遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調 整等の特 徴	色 焼 成	調 成	胎 土	遺存	備 考
1	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外底部下端-ヘラケズリ	-	-	口縁片	墨書 外体「□」	
2	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体「□」	
3	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 外底部下端-回転ヘラケズリ	-	-	体部片	墨書 外体「□」 内体「□」	
4	土師器 壺	12.2×6.50×3.50 ロクロ成形 外底部下端-静止ヘラケズリ 底部-全面静止ヘラケズリ調整	橙 硬	雲母多 長石	略完形	墨書 外体正位 「傳」	
5	土師器 壺	(13.0)×-×(3.80) ロクロ成形 外底部下端-回転ヘラケズリ	黑 硬	雲母 長石	1/4 口縁部		

B015

検出地区 K7-62-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 平面の柱穴配置が複雑となっているが、2間×2間が2棟、2間×3間が1棟の計3棟が重複した掘立柱建物跡である。

B015aは、2間×2間の掘立柱建物跡である。長軸4.53m×短軸3.64m、方位はN-12°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～3・16・20～22・24の8本である。柱痕は確認できなかった。柱のアタリはP 1で確認された。P 2はP 13の覆土を掘り込んでいた。

B015bは、2間×3間の掘立柱建物跡である。長軸4.78m×短軸4.48m、方位はN-17°-Wを示す。北側の柱列が4本となり、柱間3間となる遺構である。本遺構に属する柱穴は、P 4・5・30・6・8・28・12・13・15の9本である。柱痕は確認できなかった。柱のアタリはP 13のみであった。P 15はP 14の覆土を掘り込んでいた。

B015cは、2間×2間の掘立柱建物跡である。長軸3.27m×短軸2.94m、方位はN-77°-Eを示す。東側の柱列では中間の柱穴を検出できず、柱間は1間となっている。本遺構に属する柱穴は、P 15・16・19・25・26・12・13の7本であった。柱のアタリはP 25で確認できた。P 19はP 18とP 20によって、覆土が掘り込まれていた。

B015zは、B015の柱穴配置範囲には属するが、柱穴配置上B015a～cのいずれにも属さないものである。P 18・23・27・14・29の5本がこれにあたるが、覆土は掘立柱建物跡の柱穴覆土に似るものであった。なお、P 18はP 19の覆土を掘り込んでいた。

所見 本遺構は3棟の掘立柱建物跡の重複のため、一見、複雑な柱穴の配置ではあるが、ほぼ整然とした掘立柱建物跡である。柱穴覆土の重複から、新旧関係はB015c～B015b～、そしてB015a～と新しくなっていくものである。

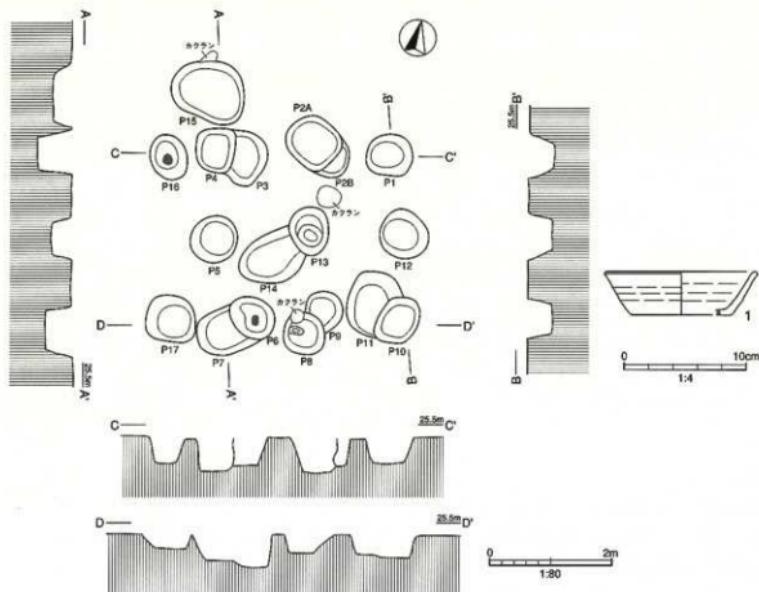


図242 B016a・b・z

B016

検出地区 K7-62-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 2間×2間の小規模な掘立柱建物跡が、2棟重複した遺構である。

B016aは、長軸2.87m×短軸2.78m、方位はN-77°-Eを示す。本遺構に属する柱穴はP 1・2A・4・5・7・9・10・12の8本である。柱痕はP 4で確認されたが、柱のアタリはいずれの柱穴でも確認できなかった。掘り込みは0.37~0.57mと深さに亘一性は感じられなかった。P 2AはP 2Bの、P 4もP 3の覆土を掘り込んでいた。

B016bは、長軸2.75m×短軸2.60m、方位はN-3°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 2B・3・16・17・6・9・8・13の8本であった。柱痕はP 16で、柱のアタリはP 6・16で確認された。また、掘り込みは0.24~0.53mであり、0.40m程度のものが中心となっている。

B016zはB016a・bの柱穴配置上で、いずれにも属さないものである。P 11・14・15がこれにあたっている。P 11とP 15は、本来、掘立柱建物跡の柱穴ではないかも知れない。

所見 柱穴覆土の切合いからB016aが新しく、B016bが古いものと捉えられた。

表58b B016遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形・調 整等の特 徴	色 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土器器 坏	(12.5)×(8.00)×3.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ	橙 硬	長石多 雲母石 黄赤色	1/3	

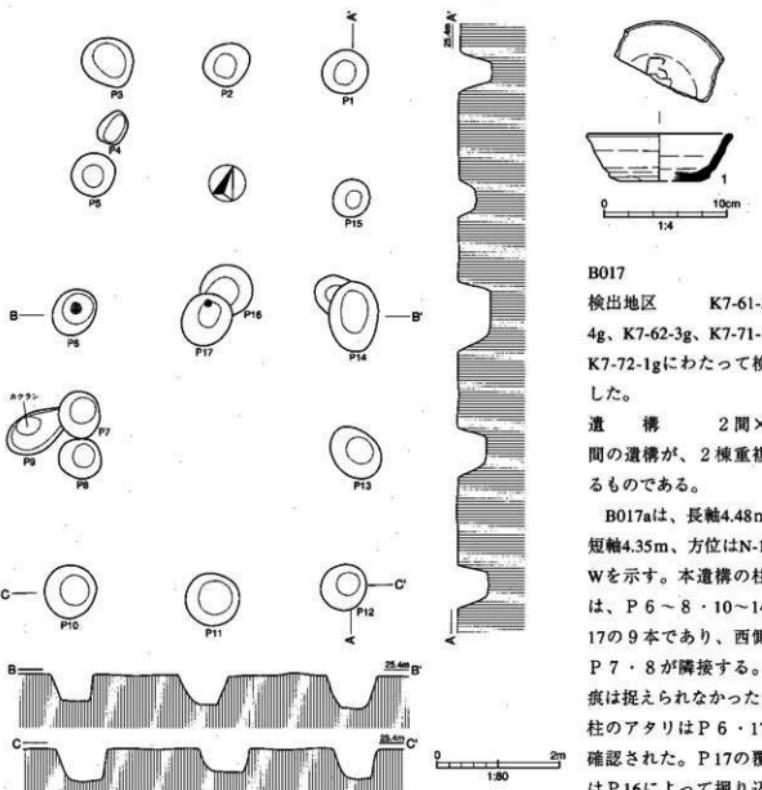


図243 B017a・b・z

B017bは、長軸4.48m×短軸3.66m、方位はN-17°-Wを示す。本遺構の柱穴は、P 1～3・5・16・14・15の7本である。柱痕がP 3で確認されたが、柱のアタリは確認できなかった。P 8の覆土がP 7に掘り込まれるため、P 8～P 7への柱の位置替えと捉えた。

B017zは、柱穴配置上でいずれにも属さない、P 4・9を一括した。

所見 調査時においては2間×4間の遺構と考えられたが、P 16・17の重複等から別個の掘立柱建物跡と捉えなおしたものである。なお、P 16・17の覆土の切合いからB017bが新しいと捉えた。

表59 B017遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・開 口径×底径×器高 形・開 等の特徴	色 燒 成	胎 土	遺存	備考
1	須恵器 坏	(12.0)×(6.60)×3.90 ロクロ成形 外底部下端-静止ハラケズリ 底部-静止ハラケズリ 欠損のため切り離し不明	黒褐 燒 (くすべ)	雲母 砂粒	1/3	縦刻 内底 「闇」

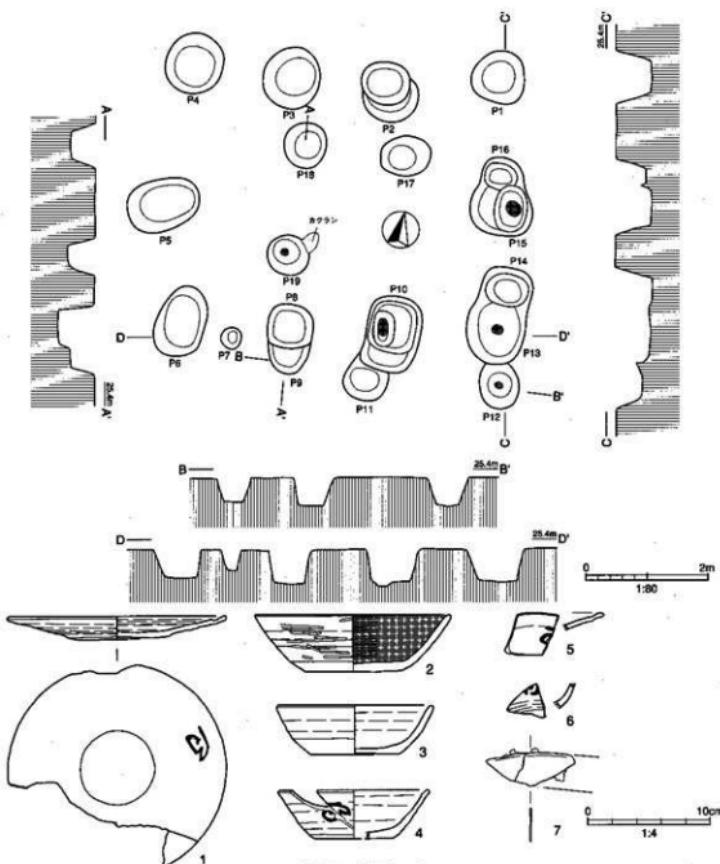


図244 B018a・b

B018

検出地区 K7-51-4g, K7-52-3g, K7-61-2g, K7-62-1gにて検出した。

遺構 2間×2間、2間×3間の各1棟の、計2棟の掘立柱建物跡である。

B018aは2間×3間の掘立柱建物跡で、長軸5.11m×短軸4.25m、方位はN-79°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～6・8・10・13・15の10本である。P 10・13・15では柱のアタリを確認した。P 3は覆土に突き固めた名残りを残し、P 5は粘土と炭化物を含んでいた。P 15も炭化物を含み、「得」と墨書きされた土師器・皿1を出土している。P 6からも少量の土師器片が出土した。なお、P 8はP 9を、P 10はP 11を、P 15はP 16の覆土をそれぞれ掘り込んでいた。

B018bは長軸3.45m×短軸3.44m、方位はN-88°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 9・11・12・14・16～19の8本で、2間×2間の掘立柱建物跡である。P 17では柱痕が、柱のアタリはP 12・19で確認されている。

B018zのP7は、いずれの掘立柱建物跡にも属さないが、覆土に粘土を極めて多量に含んでおり、粘土ピットを窺わせるものであった。

所見 本遺構は柱穴覆土から、B018aがB018bより新しい掘立柱建物跡と捉えられた。また、P7は覆土がほぼ粘土であり、B018aの補強ピットと捉えられるかも知れない。

表60 B018遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼 成	陶土	遺存	備考
1	土師器皿	17.8×6.10×1.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 褐 硬	雲母 白色	1/2	墨書 外体「得」
2	土師器壊	(16.0)×8.00×4.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミ ガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ粗い	褐 褐 黑 硬	雲母石 英長石 砂粒	1/3	内黒
3	土師器壊	(12.8)×(7.20)×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母 長石 砂粒	1/5	
4	土師器壊	(12.4)×(6.40)×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐 硬	雲母 白色	1/3	墨書 外体横位「得」
5	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体横位「墨」
6	土師器壊	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ ヘラミガキ	-	-	体部片	墨書 外体横位「墨」
7	鉄器 鎌	(7.30)×2.75×厚み0.15 8.8g	-	-	片	

B019

検出地区 K7-41-4g、K7-42-3g、K7-51-2g、K7-52-1gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡が、2棟重複するものである。

B019aは、長軸5.54m×短軸4.50m、方位はN-82°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P2・5~7・9・12・22・24・17・19の10本である。P7・22には柱痕と柱のアタリが確認できた。P2の覆土はB019bに伴うP3によって掘り込まれ、P5はP4の覆土を掘り込んでいた。

B019bは、2間×3間の掘立柱建物跡であり、長軸5.22m×短軸4.09m、方位はN-82°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P3・20・21・8・11・13~16・18の10本である。柱痕はP15に、柱のアタリはP11に確認できた。しかしP8では柱の引抜き痕が覆土より確認され、P15と掘立柱建物跡の廃絶時の趣を異にしている。P2はB019aのP2の覆土を掘り込み、P18の覆土はP19によって掘り込まれていた。P20の覆土には焼土粒子が認められた。

B019zは遺構の柱穴配置上で、B019a・bのいずれにも属さない柱穴を一括した。P4・10・23・25・26・27・28であったが、単独で掘立柱建物跡を形成するものではなかった。P9とP10では覆土からその新旧関係が捉えきれなかった。また、P23はP24の覆土を掘り込んでおり、P27の覆土はP26によって掘り込まれていた。

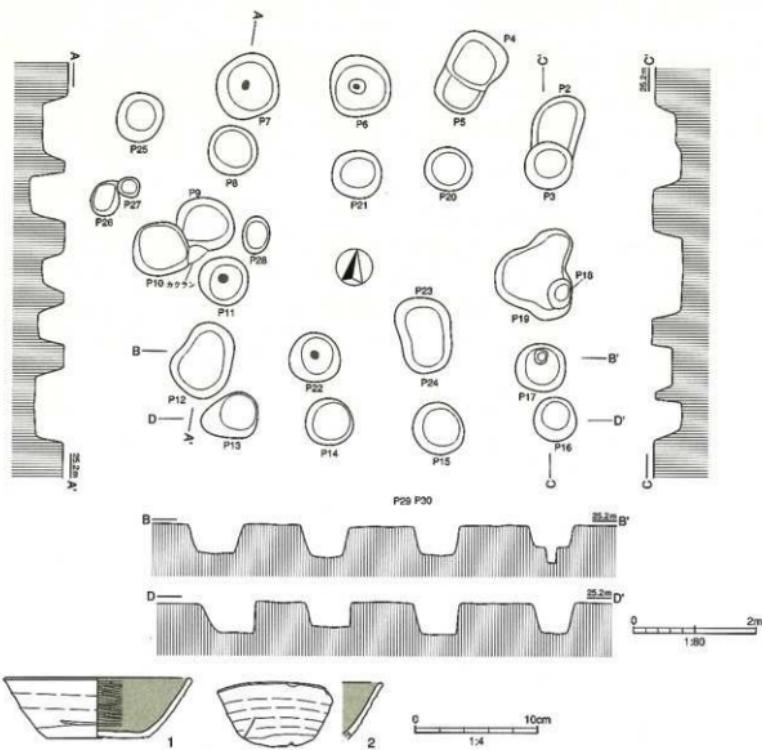


図245 B019a・b・z

所見ともに2間×3間の掘立柱建物跡であるが、重複するP2・3の新旧関係から、B019aが新しい構造と捉えられた。また、B019bでは掘立柱建物跡廃絶時の、柱の引抜きと立腐れの両者の廃棄が確認できた。

表61 B019遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形・調 整等の特 徴	色 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土器器 坏	(15.2)×8.20×5.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミ ガキ 底部一回転糸切り→回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	黒 滑 黑	雲母 長石	1/5	内黒
2	土器器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ	-	-	口縁片	ヘラ書 外体 「□」 内黒

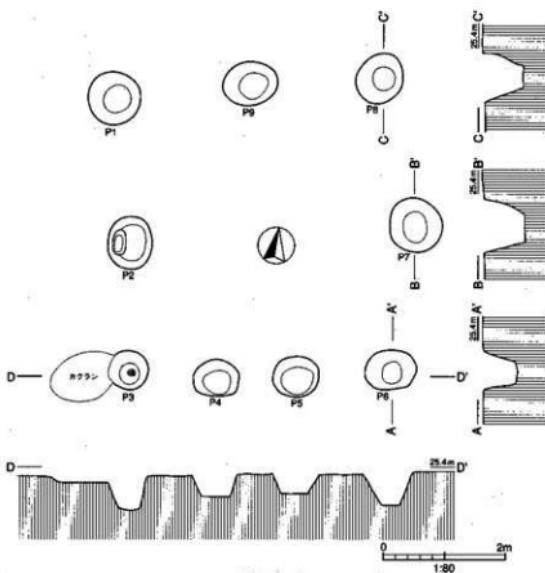


図246 B020

B020

検出地区 J7-60-4g、J7-70-2g、K7-51-3g、K7-61-1gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。南の柱列は4本となり、間数は3間となる不規則な遺構である。長軸4.82m×短軸4.35m、方位はN-19°.Eを示す。柱痕はP6・7で、柱のアタリはP3で確認できた。P6・7では、ローム粒を多く含み、突き固められた覆土を確認した。

所見 北柱列の3本の柱が、南柱列においては4本の存在となっているが、その意味までは捉えきれなかった。

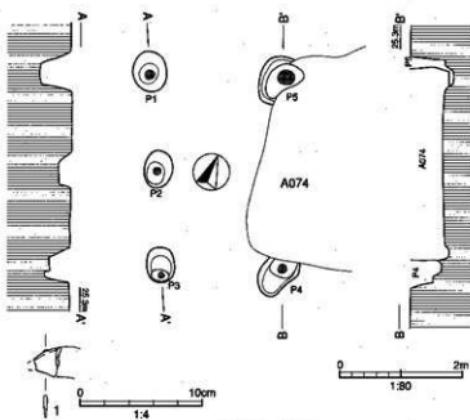


図247 B021

B021

検出地区 K7-43-4g、K7-44-3g、K7-53-2g、K7-54-1gにて検出。

遺構 1間×2間の掘立柱建物跡であるが、A074によって一部の柱穴が失われているかも知れない遺構である。長軸3.26m×短軸2.18m、方位はN-24°-Wを示す。柱痕はP1・3・4にて、柱のアタリは全ての柱穴で確認された。覆土は、突き固められた様子はなかった。深さは0.21～0.71mと様々で、P4の坑

底は（深さ0.49m）A074の床面より浅く、P5（深さ0.71m）は床面より深いものとなっていた。

所見 P2・5では柱痕が捉えきれなかったが、本遺構は廃絶時に柱を放置し、立ち腐れていったものと判断した。竪穴住居跡との重複による新旧関係は、P4・5の覆土をA074が掘り込んでいることから、B021が古いものと捉えられた。

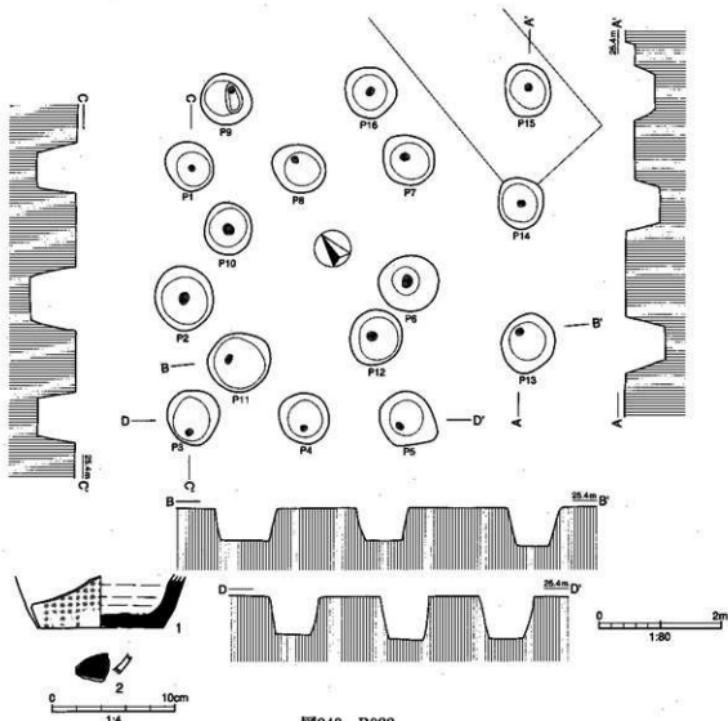


図248 B022

B022

検出地区 K8-4-4g、K8-5-3g、K8-14-2・4g、K8-15-1・3gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡の、2棟の重複である。B022aは、長軸4.36m×短軸3.42m、方位はN-39°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～8である。柱痕はP 2・6・7で確認した。B022bは、長軸4.78m×短軸4.00m、方位はN-53°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P 9～16である。柱痕はP 10・12・16で確認した。

所見 重複する柱穴がないため、新旧関係は不明であった。

表62 B022遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎上	遺存	備考
1	須恵器 甕	-×(10.2)×(4.40) 脇部に自然釉付着のため不明。おそらくロクロ成形後ヘラケズリにより調整されていると思われる	灰綠 硬	石粒	1/4 底部	一部に自然釉有
2	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外底部下端-回転ヘラケズリ	-	-	体部片	墨書 外体 「□」 赤彩

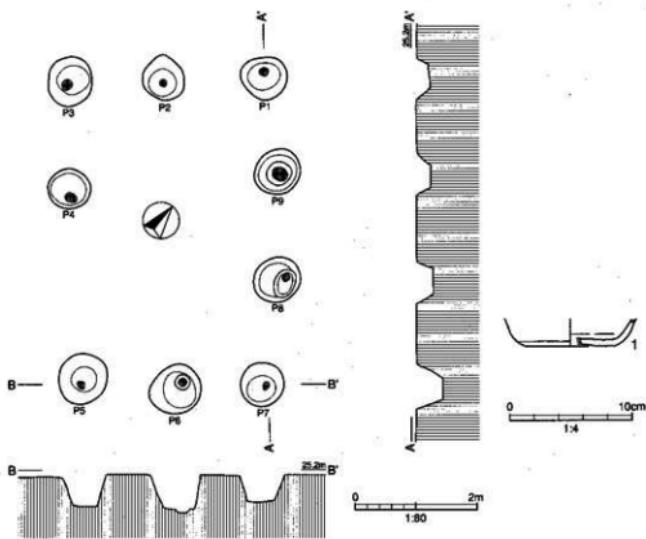


図249 B023

B023

検出地区 K8-23-4g, K8-24-3g, K8-33-2g, K8-34-1gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡であるが、西柱列の柱が1本欠ける掘立柱建物跡である。長軸4.94m×短軸3.19m、方位はN-41°-Wを示す。柱痕は、P 3・5において確認できた。また、柱のアタリは全柱穴に確認できるものであったが、ハードロームの一部が少し硬化する程度のものではっきりとはしていなかった。覆土は特に、強く突き固められてはおらず、軽く固められた程度であった。柱穴の掘り込みの深さは0.22~0.62mであるが、0.20m程度が3基、0.40m程度が2基、0.62mが1基と一様ではなかった。坑底に柱のアタリと一致して小ピットを有する柱穴が、P 6・8・9と3基認められた。なお、柱穴の壁はやや斜めに立ち上がるものであった。

所見 柱痕が確認できたことから、P 3・5は掘立柱建物跡の廃絶後、引抜かれずに立ち腐れたものと判断された。他の柱穴では柱痕が捉えきれなかったが、P 2・5の例からいざれも立ち腐れたものと想定している。

表63 B023遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調或	胎土	遺存	備考
1	土器 壺	—(7.40)×(2.30) ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 明褐色	雲母多 白色	底部	

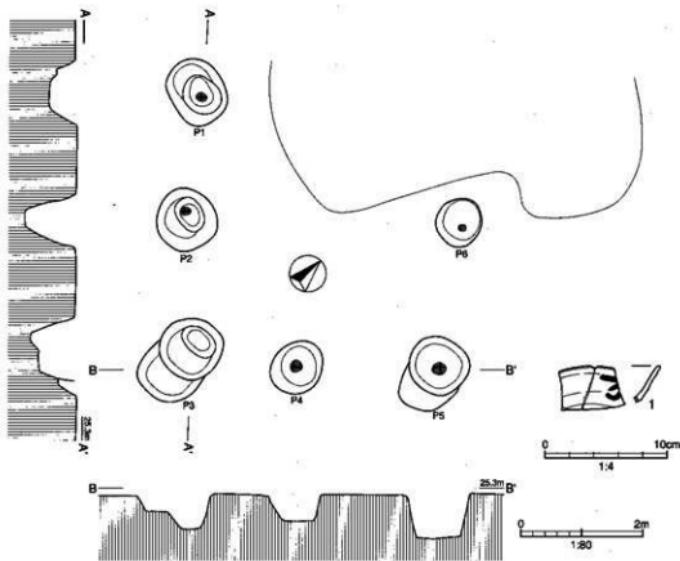


図250 B024

B024

検出地区 K7-93-4g、K7-94-3g、K8-3-2g、K8-4-1gにて検出した。

遺構 2間×2間が想定される掘立柱建物跡である。長軸4.36m×短軸4.15m、方位はN-42°-Wを示す。北側の想定される2本の柱穴は、保存樹木のため調査を行えなかった。柱痕はP 1～6にて捉えられ、調査した柱穴の全てで確認できた。柱のアタリはP 3を除く、5本で確認できた。また、覆土はよく突き固められていた。掘り込みの深さは、0.42～0.80mと一様ではなかった。

所見 保存樹木のため遺構全体を調査することができなかつたが、2間×2間の掘立柱建物跡を十分想定できる柱穴の配置であった。調査において、P 3の覆土からは捉えられなかつたが、柱の配置替えが行われたものかも知れない。

表64 B024遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形・調 整等の 特 徴	色 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	-	-	口縁片	墨書き 外体正位 「万」

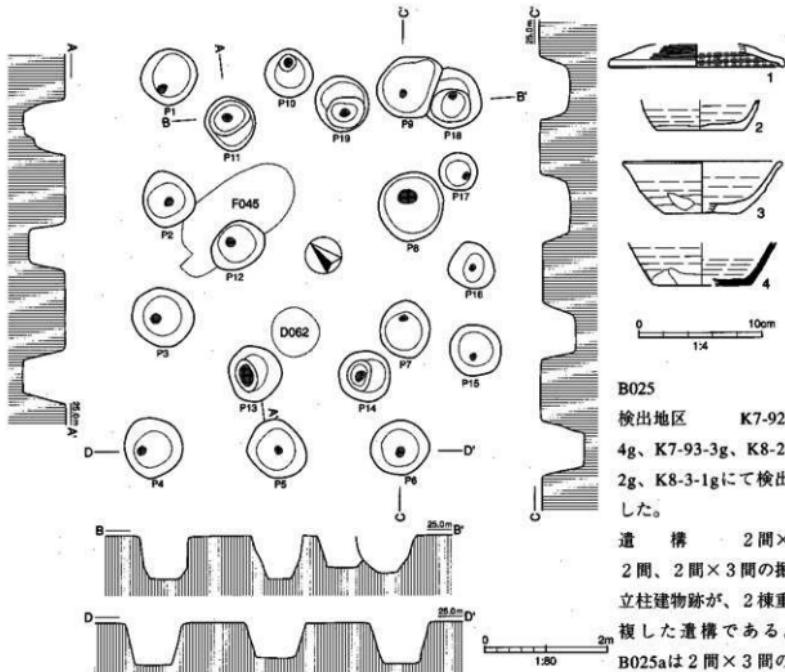


図251 B025

1~10であり、柱痕はP 2・4・7・8・10で確認した。B025bは2間×2間の遺構で、長軸4.23m×短軸3.64m、方位はN-43°-Eを示す。柱穴はP 11~19であり、柱痕はP 11・18で確認した。

所見 柱痕の覆土に粘土が少し混合し、B025bの覆土はB025aに比べ、黒色土系の覆土であった。なお、重複する柱穴がなかったため、新旧関係は捉えられなかった。

表65 B025遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 或形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色 焼成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 蓋	(14.4)×-(1.90) ロクロ成形 外面 密なハラミガキ 内面 密なハラミガキ	-	-	口縁片	内黒	
2	土師器 坏	-×(7.00)×(2.50) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	橙 明褐色	雲母多 石英 長石	1/4 底部		
3	土師器 坏	(13.0)×(6.20)×4.30 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐 硬	雲母多 白色	1/4		
4	須恵器 坏	-×(8.00)×(3.50) ロクロ成形 外体部下端-静止ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	灰 硬	石英・ 長石・ 白色多	1/4 底部		

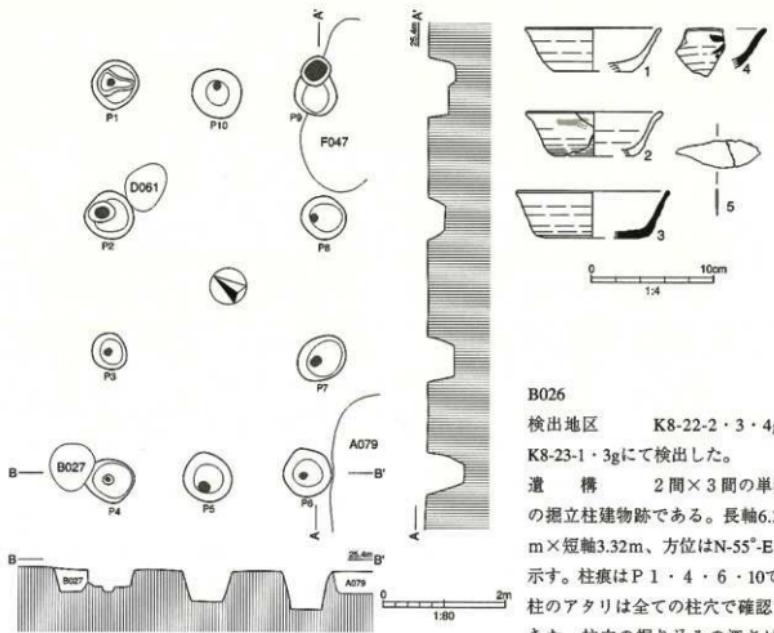


図252 B026

所見 4本の柱穴から柱痕が確認できたことで、本遺構の柱のほとんどは引抜きではなく、立廻れと想定できるものであった。また、長軸に対して短軸が狭い、細身の掘立柱建物跡である。

表66 B026遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壊	11.2×(6.40)×3.60 ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	褐 硬	雲母多 白色	1/5	
2	土師器 壊	(11.2)×(6.40)×3.70 ロクロ成形 器面磨耗のため不明 外底部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	明褐 硬	雲母多 白色	1/5	墨書 外体 「□」 「得」か?
3	須恵器 壊	(12.6)×(9.20)×3.90 ロクロ成形 底部一静止ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	くすべ	雲母石 英砂赤 白多	1/4	
4	須恵器 壊	-×-×- ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ	-	-	口縁片	墨書 外体正位 「四」
5	鉄器 槍筒具?	(6.7)×2.1×0.2 鍔の可能性や、鎌の可能性もあり、機種として判然としない。	-	-	片	木葉形織?

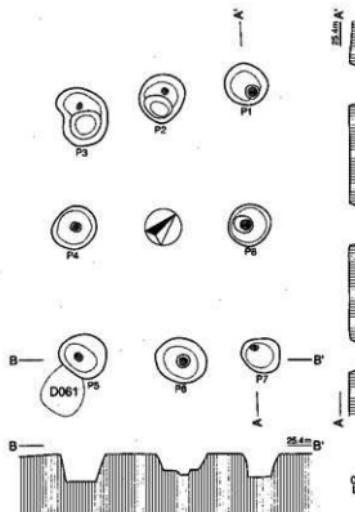


図253 B027



B027

検出地区 K8-12-3・4g、K8-22-1・2gで検出。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡であった。長軸4.47m×短軸2.79m、方位はN-41°-Wを示す。柱痕はP3・7・9で、柱のアカリは全柱穴で確認できた。覆土はよく突き固められていた。

所見 2間×2間の掘立柱建物跡であるが、長軸方向に大きく伸びる遺構であった。B026と一部柱穴の上場が重なるように極めて近いが、重複関係がなく、新旧は捉えられなかった。

表67 B027遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	(13.0)×(8.20)×4.10 ロクロ成形 外体部下半—回転ヘラケズリ 底部—回転糸切り—回転ヘラケズリ	暗褐色 ～橙紅 ～澄 硬	雲母多	1/6	墨書き 外体部位 「得」

B028

検出地区 K8-11-4g、K8-12-3g、K8-21-2g、K8-22-1gにて検出。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。長軸5.46m×短軸4.20m、方位はN-55°-Eを示す。柱痕はP2～5・9の5本に、柱のアカリは全ての柱穴で確認できた。柱穴の深さは、0.56～0.79mと全体的に深くなっている。覆土は、全体的に突き固められた様子を残していた。P7・9・10には、南側に別のある小ビットがあったが、それぞれの新旧関係は捉えられなかった。

所見 B042と重複するが、重複する柱穴覆土から本遺構が新しく建てられた掘立柱建物跡であると捉えられる。柱穴の4本に柱痕が確認できたことは、遺構廃絶時において柱の立腐れたものと捉えられた。また、P7・9・10に付随する南側の小ビットは、P11とともに小規模な掘立柱建物跡を残していた可能性もあったが、調査では捉えきれなかった。なお、P11はB028の柱穴配置上で遺漏するものであり、遺構観察表ではB028zとして扱っている。

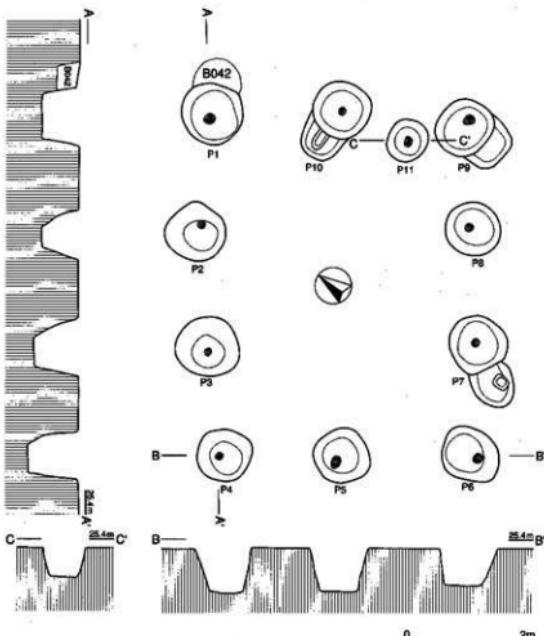


図254 B028

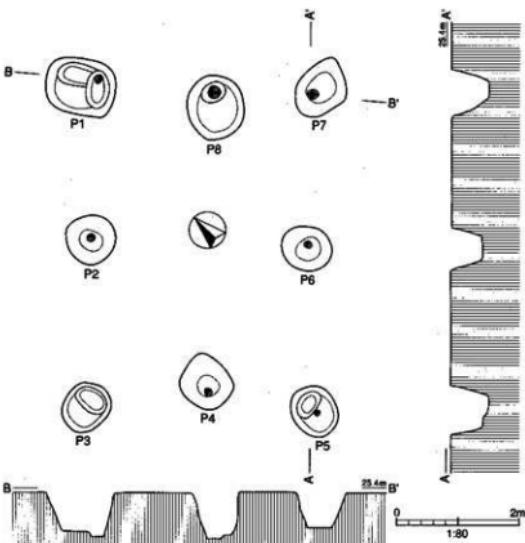


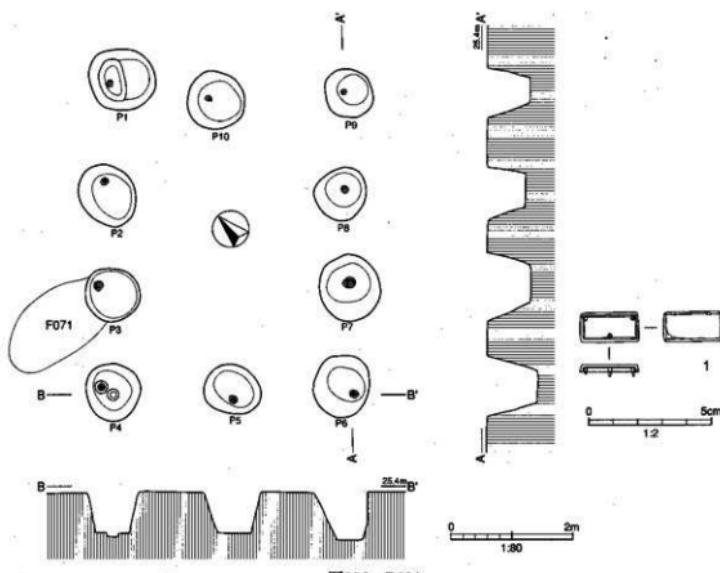
図255 B029

B029

検出地区 K8-1-4g、K8-11-1gにて
検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建
物跡である。長軸5.19m×短軸3.68m、
方位はN-48°-Eを示す。各柱列の中間の
柱穴であるP2・4・6・8は、各隅の
柱穴を結ぶ軸線からやや内側に設けら
れている。柱痕はP1・3・6の5本で、
柱のアカリは東隅のP3を除く、
P1・2・4～8にて確認された。掘
り込みは、0.52～0.70mであった。覆土
は、比較的よく突き固められた状態で
ある。

所見 掘立柱建物跡の柱列は
平行乃至一直線にならないことが多
いが、本遺構では各柱列とも中間の柱穴
配置が、やや内側に入り込むものであ
る。II地区でも異例の遺構であった。
このことから建物全体を支える主柱穴
は各隅の柱穴であり、中間の柱穴は高
床を支える柱として捉えられるかもし
れない。しかし即断ができず、類例資
料の増加をまって検討していきたい。
なお、本掘立柱建物跡では柱痕が4本
確認されたことは、全体として遺構廃絶
後に放置され、柱の立腐れが進行したも
のと捉えた。



B030

検出地区 K8-1-2・4g、K8-2-1・3gにて検出。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。長軸4.85m×短軸3.91m、方位はN-42°-Eを示す。柱痕はP 2～8において、柱のアタリは全柱穴において確認した。覆土はよく突き固められ、柱穴は深く0.60～0.82mとなる。P 8の覆土中より、巡方が出土している。

所見 P 4・10がやや内側に入り込む、掘立柱建物跡であった。

表68 B030遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調兼等の特徴	色 焼成	胎 土	遺存	備考
1	銀製品 帶金具 巡方	2.45×1.20×厚み0.10 3.2g	-	-	完形	3つの突起箇所 有り

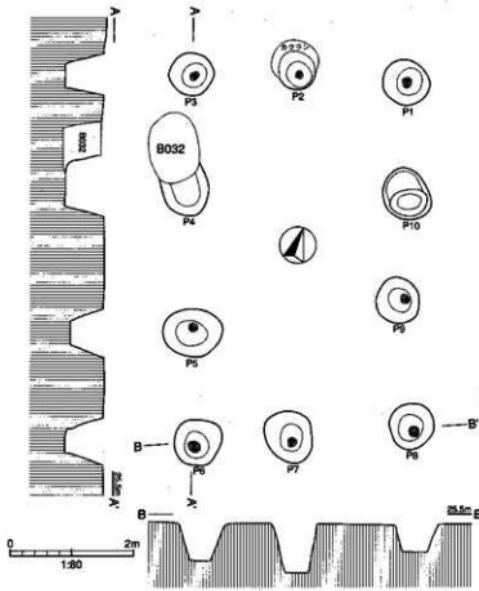


図257 B031

B031

検出地区 J8-10-4g、K8-1-1・2・3・4gで検出。
遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。
長軸6.08m×短軸3.50m、方位はN-18°-Wを示す。
B032と重複する遺構である。柱痕はP 1・3・5・7～9で確認された。柱穴は深く、0.45～0.78mであった。覆土はよく突き固められていた。
所見 B032と重複する遺構であるが、P 4 覆土の切合から本遺構が新しいものと捉えられた。また、6本の柱穴において柱痕が確認されたことから、本遺構は全体として柱の立ち腐れと捉えられた。しかし全体として、長軸に対して短軸が短い、細身の掘立柱建物跡という印象を受ける遺構である。そして長軸に対して、短軸は57%程度であり、長方形を意識して建てた建物といった感があるものである。

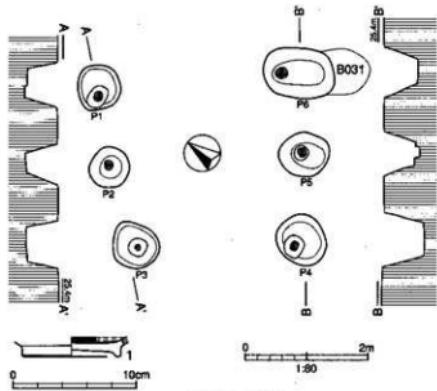


図258 B032

B032

検出地区 J8-10-2g、K8-1-1・1gにて検出した。
遺構 1間×2間の掘立柱建物跡である。
長軸3.34m×短軸2.71mである。短軸となる北東柱列が3.02mであり南西柱列の2.71mと大きく距離がことなるため、方位を示すことはできなかった。柱穴の配置が台形状となる、不規則な掘立柱建物跡である。柱痕はP 2～6で、柱のアカリは全柱穴において確認した。柱穴の深さは、0.51～0.65mであるが、0.50m程度の深さが多かった。覆土は、比較的よく突き固められていた。
所見 このような柱穴配置で掘立柱建物が建つか、疑問を生じる遺構である。しかし周辺に柱穴を配置すべき関連する遺構がないこと等から、独立した掘立柱建物跡とした。P 6の覆土をB031、P 4の柱穴が掘り込むことから、B031が新しく、本遺構は古いものと捉えられた。

表69 B032遺物観察表

(単位cm)

No	種別 形	法量 成形・調 整等の特 徴	色 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 台付壺	-×-×(1.60) 台部径(7.60) ロクロ成形 内底部-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り→回転ヘラケズリ 高台部-ナデ	暗褐色 黒褐色 黒	多 白色	1/2 底部	内黒

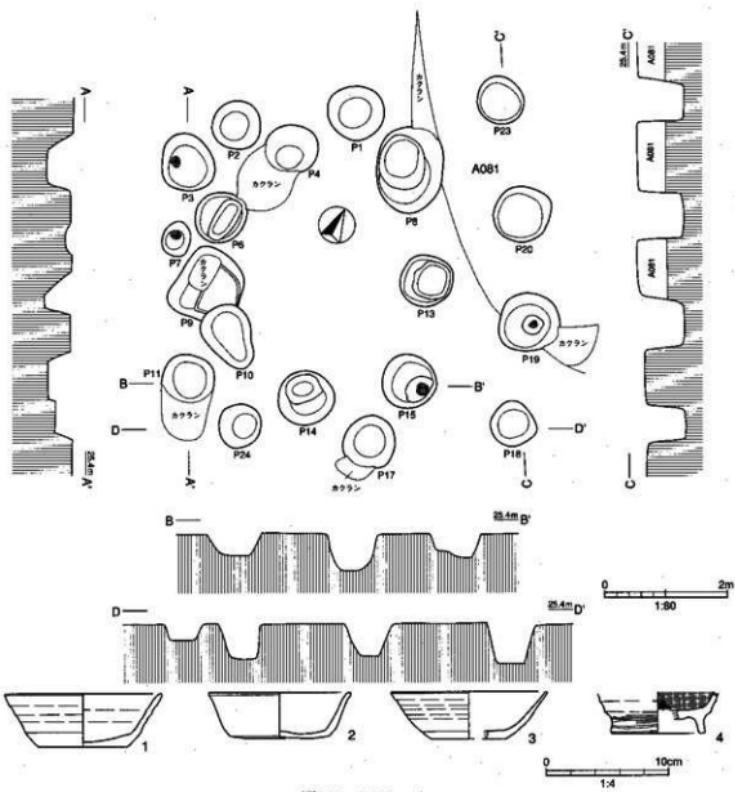


図259 B033a・b・z

表70 B033遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調 成	胎 土	遺存	備 考
1	土器 壺	12.8×7.20×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面全面回転ヘラケズリ	暗褐色～ 暗赤褐色	硬	雲母多 白色長 石砂粒	1/2	色調・焼成 褐～赤褐
2	土器 壺	(11.6)×(8.20)×3.80 ロクロ成形 底部一面全面静止ヘラケズリ 回転ヘラ切りか?	褐色 硬	白多雲 母石英 長石砂		1/2	
3	土器 壺	(12.7)×(6.00)×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	明褐色 橙	雲母 白色		1/4	やや砂質
4	土器 高台壺	-×-×- ロクロ成形 外体部一粗いヘラミガキ 内体部一滑なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ 高台部一ナデ、ヘラミガキ	褐色 黒	雲母 白色		1/3 底部	

検出地区 K8-21-2・4g, K8-22-1・3g, K8-32-1gにて検出した。

遺構 2間×2間、2間×3間の2棟が、重複した掘立柱建物跡である。

B033aは、長軸5.31m×短軸4.56m、方位はN-27°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P1・2・6・10・24・17~19・20・23である。柱痕はP1・2・18・19にて、柱のアタリはP19で確認された。柱穴の深さは、0.52~0.63mと平均的であった。

B033bは、長軸3.75m×短軸3.73m、方位はN-63°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P8・4・3・7・11・14・15・13である。柱痕P24で、柱のアタリはP3・7・15で確認された。柱穴の深さは、P7のように0.09mときわめて浅いものもありしかも、0.36~0.62mと深さに差があった。P14から土師器坏2が出土している。

所見 2棟の重複した掘立柱建物跡であるが、ともに重複した柱穴がないため、新旧関係は捉えられなかった。なお、P9はいずれにも属さないため、B033zとして分離した。

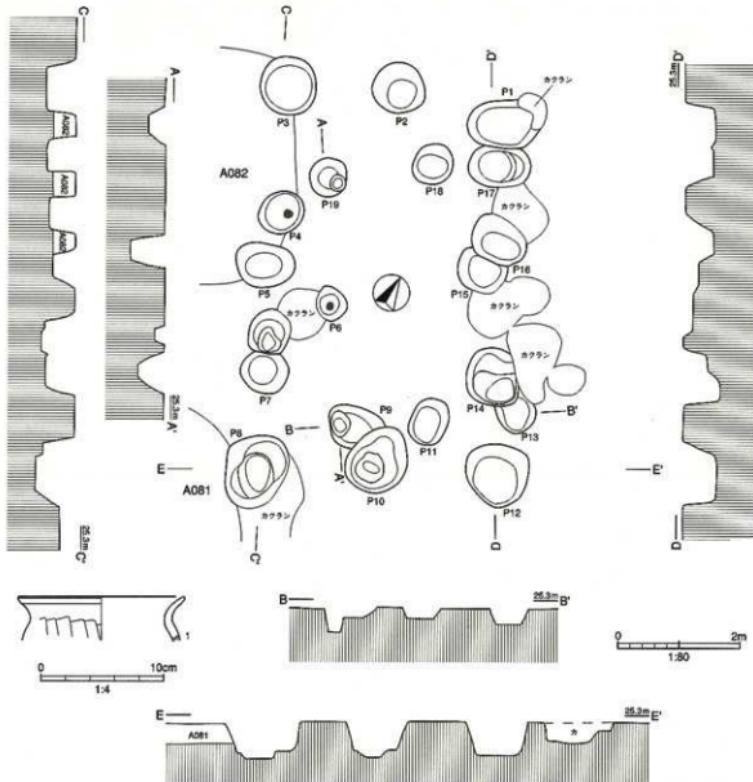


図260 B033a・b

B035

検出地区 J8-30-4g, J8-40-2g, K8-21-3g, K8-31-1gにて検出した。

遺構 2間×2間、2間×3間の、重複した2棟の掘立柱建物跡である。

B035aは、長軸6.20m×短軸3.73m、方位はN-26°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～5・7・8・10・13・14・16である。柱痕は、P 3・8にて、柱のアタリはP 4にて確認した。柱穴の深さは、0.37～0.62mであるが、0.50m程度が中心である。

B035bは、長軸4.07m×短軸2.81m、方位はN-31°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P 17～19・6・9・11・13・15である。柱痕はP 17・18にて確認したが、柱のアタリは認められなかった。柱穴の深さは0.18～0.56mと一様ではなかった。

所見 重複するP 10・11は、P 10の覆土がP 11によって掘り込まれていることから、B035aがB035bより新しい遺構と捉えられた。II地区では珍しく、柱のアタリが把握しにくかった掘立柱建物跡であった。なお、竪穴住居跡とも重複しているが、いずれも住居跡に柱穴が掘り込まれているものであった。また、土師器小型甕が出土しているが、覆土一括となり、出土遺構の決定はできなかった。

表71 B035遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 底径×高 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型甕	(13.6)×—×(3.70) 外面 口縁部—ヨコナデ後脚部底辺へラケズリ 内面 ナデ	暗褐色 黒褐色	青母 白色	1/5 口縁部	

B036

検出地区 J8-29-2・3・4g, J8-30-1・3g, J8-39-2g, J8-40-1gにて検出した。

遺構 2間×3間の、重複した2棟の掘立柱建物跡である。

B036aは2間×3間の掘立柱建物跡であり、長軸5.70m×短軸4.14m、方位はN-20°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～4・6・8・10・12・14・16であった。柱痕はP 5において確認されたが、柱のアタリはP 8以外に認められなかった。柱穴の深さは0.46～0.59mあり、0.55m以上のものが多かった。覆土はロームや暗褐色土を主体としていたが、P 5では粘土の混入が認められた。

B036bは2間×3間の掘立柱建物跡であり、長軸5.70m×短軸5.06m、方位はN-59°-Eを示す。ただ、西側の柱列は4本の柱穴であり、間数は3間と捉えられた不規則なものであった。本遺構に属する柱穴は、P 17～21・9・11・13・15であり、北西列の中間と北隅の柱穴は検出できなかった。柱痕はP 18～20の3本で確認し、柱のアタリは認められなかった。P 17とP 19の覆土には、粘土が認められた。

B036zはB036a・b掘立柱建物跡の柱穴配置上で、いずれにも属さない柱穴をまとめた。P 5・7がこれに該当するが、B036aに属するものかも知れない。

所見 重複する2棟の掘立柱建物跡であるが、P 8・9、P 10・11、P 14・15で柱穴が切合っていた。それぞれB036a P 8・10・14がB036b P 9・11・15の覆土を掘り込んでおり、このことからB036aがB036bより新しいものであると捉えられた。なお、P 12・13の重複関係は不明瞭で捉えきれなかった。B036a・bとともに多くの柱のアタリが捉えられなかつたが、II地区の掘立柱建物跡として珍しい例となつている。

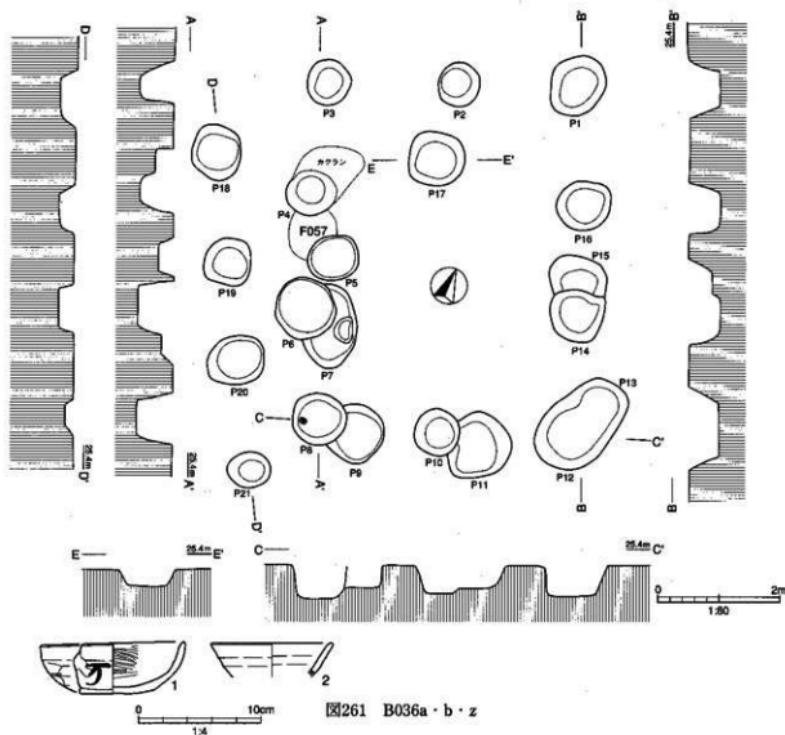


図261 B036a・b・z

本造構からは、体部が手持ちヘラ削りの土師器坏1が出土している。その出土状況から、埋納ということには捉えられなかった。また、豈穴住居跡からの出土の多い文字である「万」が墨書きされており、豈穴住居跡と掘立柱建物跡の関係を知る資料となっている。

表72 B036遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	11.8×6.20×4.30 口縁を除き手持ヘラケズリ 内底一黒ずむ(黒色) 内底部 内面へラミガキ有り	暗淡褐	白色 赤色	2/3	墨書き 外体正位 「万」
2	土師器 坏	(8.00)××(2.80) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多	1/5 口縁部	

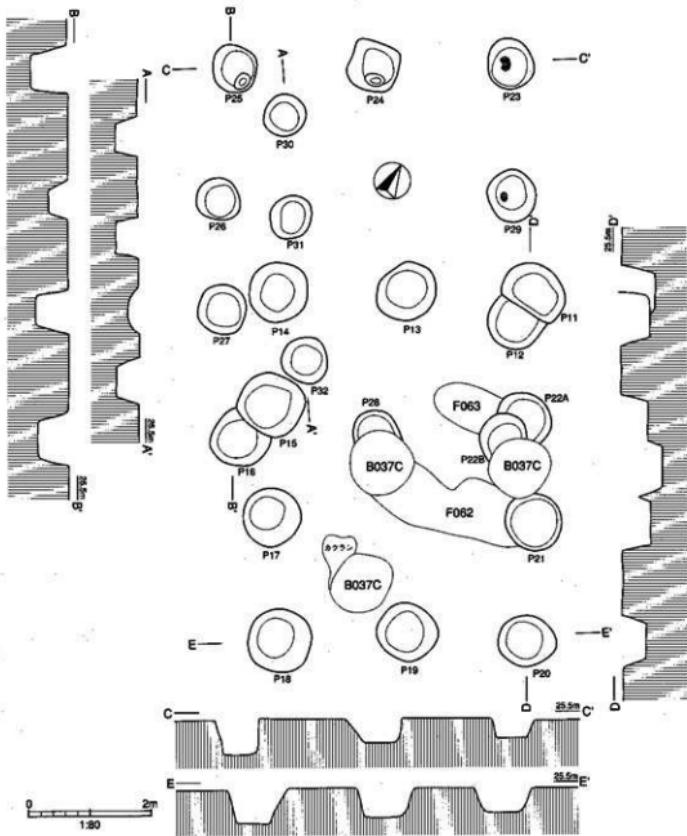


図262 B037a・b

B037

検出地区 J8-10-3・4g, J8-20-1・2・3・4g, K8-11-1・2gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡が、3棟重複した遺構である。(なお、図は2図に分かれている)

B037aは長軸6.10m×短軸4.45m、方位はN-28°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P23~27・16・28・22B・12・29であった。柱穴の柱のアタリはP23・29で確認された。P11で10の土師器壺底部が出土している。

B037bは長軸5.62m×短軸4.06m、方位はN-27°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P11・13~22Aであった。柱穴の柱のアタリは認められなかった。P17~22の覆土には、焼土ブロックや炭化粒が

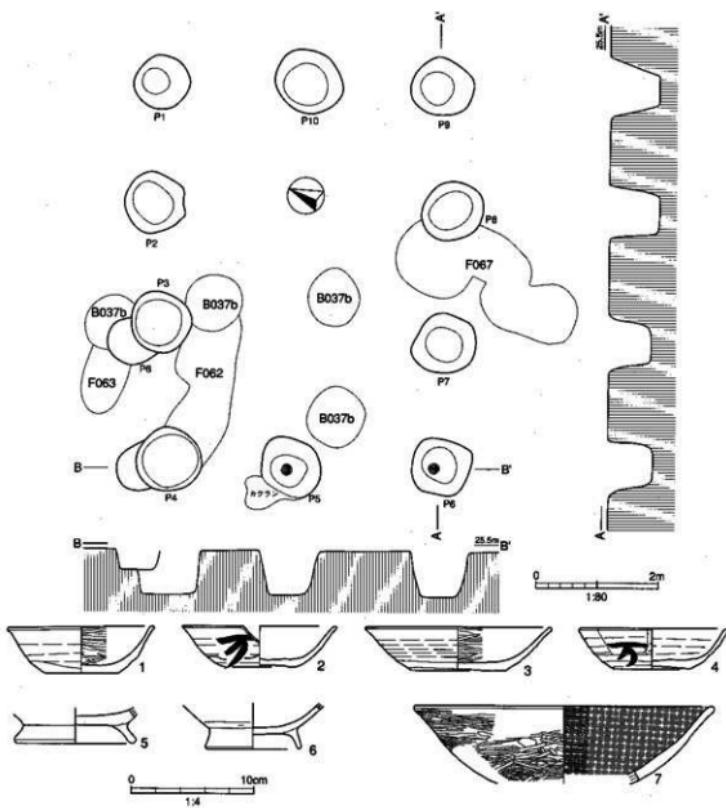


図263 B037c

認められた。遺物はP14からは坑底近くで土師器壺や壺の大型片が出土した。土師器壺のうち1点には「万」が墨書きされていた。P15や17でも坑底近くから、大型片が出土している。遺物は2~4・7~9・11が出土している。

B037cは長軸6.20m×短軸4.48m、方位はN-68°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P1~10であった。柱痕はP1・2・3で、柱のアタリはP5・6で認められた。遺物は1・12が出土している。

所見 図が分離されたため把握しにくくなっているが、B037a・bとB037cは大きく方位が異なるものであった。重複の新旧関係であるが、P16がP15の覆土を掘り込んでおり、B037bよりB037aが新しいものと捉えることができた。しかしB037cについては把握できなかった。なお、B037zとしてP30~32を一括した。

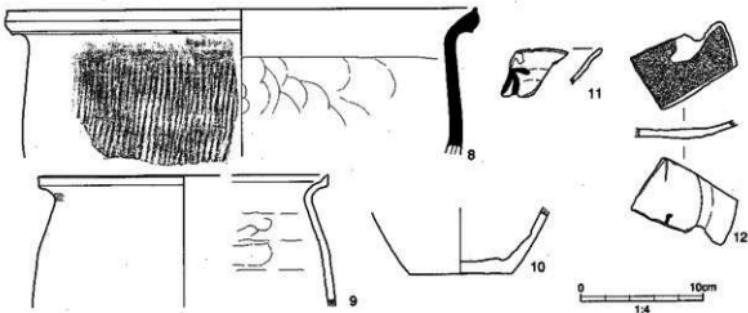


図264 B037a · b · c

(単位cm)

表73 B037遺物観察表

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壊	11.9×5.90×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り	褐 硬		雲母石 英赤色 黒色	略完形	
2	土師器 壊	(12.6)×5.80×3.40 ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ	褐 硬		雲母 赤色 黒色	1/3 漆書 外体正位 「万」	
3	土師器 壊	(15.2)×7.60×3.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り一回転ヘラケズリ	褐		雲母赤 色黒色 白色	1/3	
4	土師器 壊	12.4×6.00×3.40 ロクロ成形 外体下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り一回転ヘラケズリ	淡褐 硬		雲母石 英赤色 白色	完形 漆書 外体正位 「万」	
5	土師器 高台付 壊	-×-×(2.90) 台部径9.80 ロクロ成形 内体部一密なヘラミガキ ガッシャリした高台部(全体といふべきか?)	橙褐 硬		雲母多 石英長 石白色	底部 胎土 黑色 赤色	
6	土師器 高台付 壊	-×-×(3.80) 台部径7.80 ロクロ成形 内体部一ミガキ有り 底部一回転ヘラケズリ 外面一暗褐色 体溝下～高台一黒味 内面一淡褐 高台内一黒味	褐		雲母長 石赤色 白色	底部	
7	土師器 壊(大型)	(24.6)×-×(6.40) ロクロ成形 外体部一密なミガキ 内体部一密なミガキ	-	-	口縁 部片		内黒
8	須恵器 壺	(29.0)×-×- 外面 刷上部一タクキメ 口縁部一ヨコナデ 頸部一ヨコナデ 内面 刷上部一ヨコナデ 細かな当具痕がある	灰 不良		雲母赤 色石英 黒色砂	1/5 口縁部	胎土 長石 白色
9	土師器 壺	(23.8)×-×(10.8) 驚積 外面 ナデ 口縁一つまみナデ	暗淡赤 褐色 暗褐色		雲母 長石	1/6 口縁部	
10	土師器 壺	-×8.40×(5.40) 外面 全体著しいミガキか? 不明瞭 底部は極めて荒く作られ、刷との接合も極めて荒い指頭による横ナデ	-		雲母赤 色石英 長石	底部	
11	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 内体部一密なヘラミガキ	-	-	口縁 部片		漆書 外体正位 「万」
12	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 転用鏡(内面墨痕有り)	-	-	底部片		漆書 外底「□」 ヘラ書外底「□」

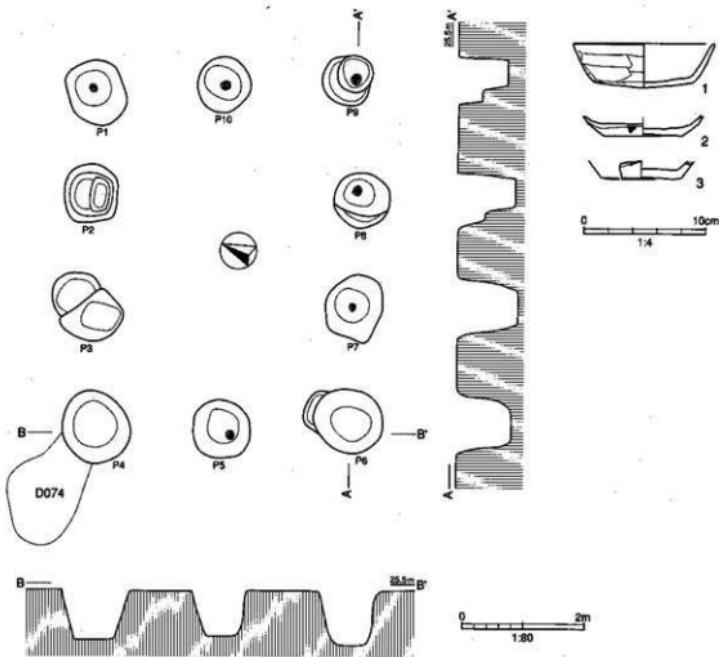


図265 B038

B038

検出地区 J7-100-3・4g、J8-9-2g、J8-10-1・2・3gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。長軸5.62m×短軸4.22m、方位はN-68°-Eを示す。柱痕はP 2・4・5・7・9にて確認された。柱のアタリはP 1・5・7~10にて認められた。柱穴の深さは0.72~0.97mと深いものであった。覆土には白色粘土が混じっていた。

所見 P 2・3・6・8・9において、テラス状に段差が認められた。深さは0.5m程度であるが、ほぼ同柱穴を使った掘立柱建物跡の建替えの可能性もあった。

表74 B038遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
1	土器 壺	(11.6)×(8.20)×3.70 ロクロ成形 外体部一ハラケズリ鏡口部横部横部ナデ 内体部一ナデ(後ハラミガキ?) 底部一静止ハラケズリ 全面ハラケズリ	赤褐色 硬	白色多 雲母石 英長石	1/4	
2	土器 壺	—×6.30×(1.80) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 燒成 硬	雲母多 赤色 白色	底部	墨書 外体 「□」
3	土器 壺	—×6.60×(1.50) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 燒成 硬	—	1/2 底部	墨書 外体 「□」

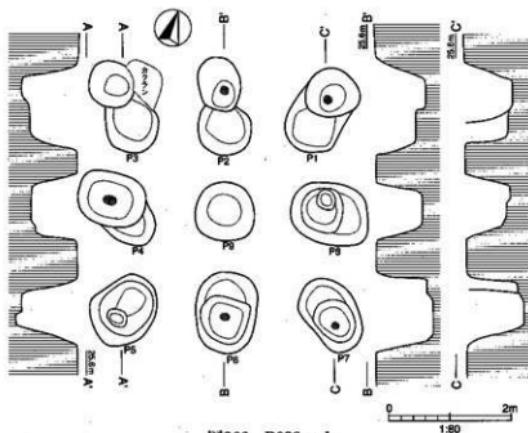


図266 B039a・b

B039
遺構 2間四方の掘立柱建物跡の、2棟の重複である。B039aは、長軸3.81m×短軸3.60m、方位N-18°-W。B039bは、長軸3.10m×短軸3.00m、方位N-71°-Eを示す。

所見 北側柱列において判断できた。総柱式と捉えた。

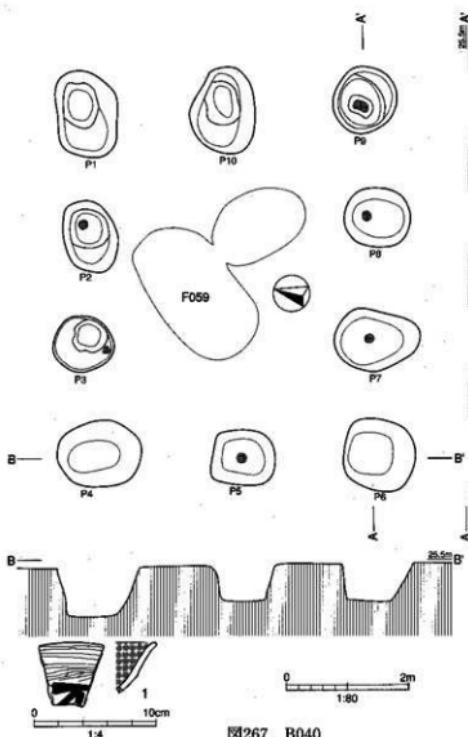


図267 B040

B040
遺構 2間×3間の掘立柱建物跡である。長軸5.64m×短軸4.52m、方位N-75°-Eを示す。P 2・3・8で柱痕が捉えられた。また、P 1・5～9では中心から外側に粘土を充填していた。混合というより粘土塊といえた。P 6・7では充填した粘土の内側に焼土ブロックが柱痕状に混入している。

所見 覆土の柱痕内に粘土粒子が混合していた例は、II地区においても検出されているが、まるで片側への倒壊を防ぐように粘土を充填している例は初めてである。また、平面から丸く柱痕内に入り込むように焼土がP 6・7で確認されたが、柱が炭化材としては残っておらず、焼失したとは考えにくいものであった。なお、本遺構から「万」と記された墨書き器片が出土している。

表75 B040遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器 形	法 量 成 形・調 整等の特 徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備 考
1	土器 壺	-×-×- ロクロ底形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部-密なヘラミガキ	-	-	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」 内黒

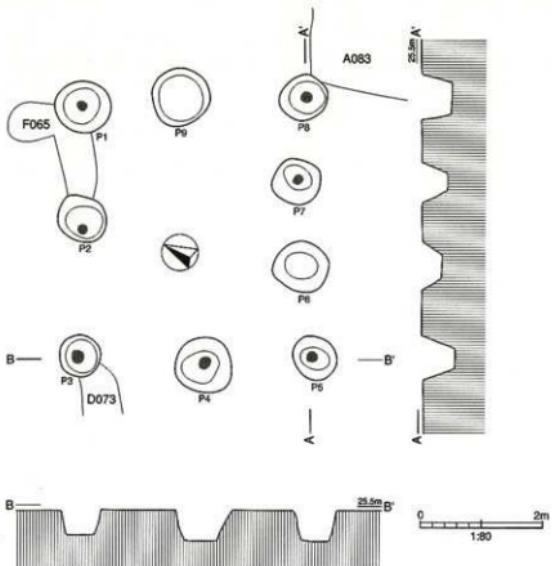


図268 B041

B041

検出地区 J7-98-4g、J7-99-3g、J8-1-2・4g、J8-9-1・3gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡であるが、南東柱列において4本柱穴となり、柱間が3間となっているものである。長軸4.25m×短軸3.70m、方位はN-62°-Eを示す。柱痕はP 1・3・4・5・9にて、柱のアクリはP 6・9を除き確認できた。柱穴の深さは0.32~0.50mの間である。覆土はよく突き固められている。

所見 長軸方向の南東柱列が柱穴4本の3間となるが、ほぼ等間隔であり、柱の配置替えとは捉えられなかった。このような例がⅡ地区にはやや目立つが、掘立柱建物跡についてはの検討は、IV・V地区の掘立柱建物跡群と併せて検討する必要があろう。なお、A083とは重複はしていなかった。

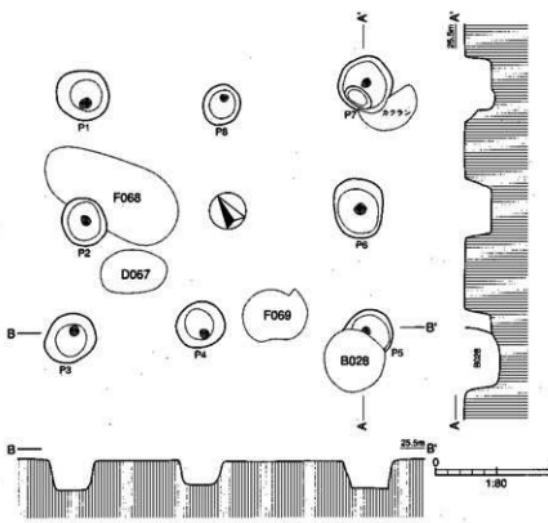


図269 B042

B042

検出地区 J8-11-3・4g、
J8-21-1・2gにて検出した。

遺構 2間×2間の
掘立柱建物跡である。長軸
4.53m×短軸3.98m、方位は
N-60°-Wを示す。柱痕は2・
3・7・8にて、また、柱の
アタリは全柱穴で確認した。
柱穴の掘り込みの深さは、
0.39~0.49mとほぼ一定して
いた。覆土は、比較的よく突
き固められていた。

所見 B028と重複す
る遺構であるが、B028が新し
い遺構である。柱は柱痕の遺
存から立ち腐れと捉えた。

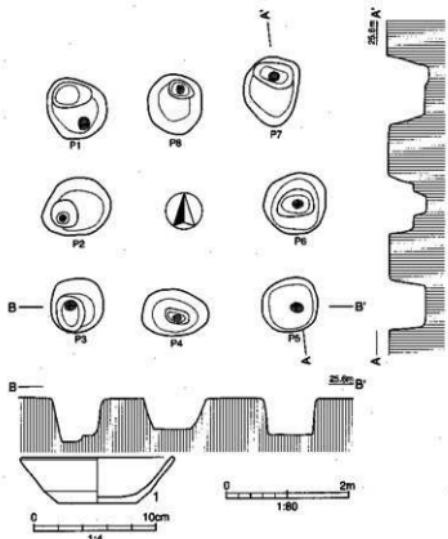


図270 B043

B043

検出地区 J8-18-3・4g、
J8-28-1・2gにて検出。

遺構 2間×2間の
小規模な掘立柱建物跡である。
長軸3.60m×短軸3.50m、
方位はN-90°-Wを示す。ほぼ
東西に建物長軸の軸線をおい
ている。柱痕と柱のアタリは、
全柱穴で確認できた。坑底に
小ピットをもつ柱穴が多かつた。
柱穴は0.49~0.66mの掘
り込みの深さであった。覆土
は、比較的よく縮まっていた。

所見 全柱穴とも覆
土に柱痕を確認できた掘立柱
建物跡であるが、II地区では
例の少ないものであった。こ
のことから、柱は遺構発絶時

に引抜きを行わず、そのまま放置した立ち腐れと捉えられた。また、本遺構は2間四方の掘立柱建物跡
としても、小規模な遺構であった。

表76 B043遺物觀察表

(単位cm)

No.	種別 器形	法 度 成 形・調 整等の特 徴	口 径×底 径×器 高	色 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 壺	(12.6)×(6.40)×3.80 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ 内外面とも器面の剥離が激しい ロクロメの識別ができない	ロクロ成形	器面剥 離のた め不明	雲母多 長石赤 色白色	1/4	

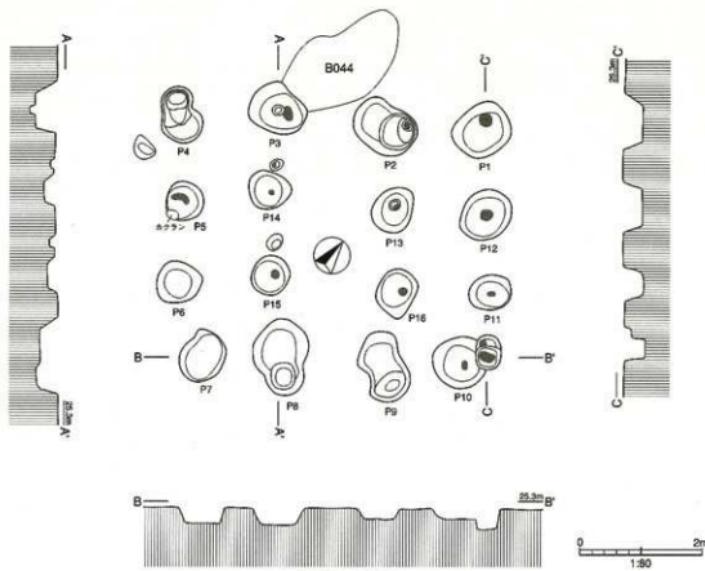


図271 B044

B044

検出地区 K7-55-4g、K7-56-3g、K7-65-1・2g、K7-66-1gにて検出した。

遺構 3間×3間の総柱式の掘立柱建物跡である。長軸5.03m×短軸4.05m、方位はN-56°-Eを示す。覆土からは明瞭に柱痕を確認することはできず、柱のアタリだけがP1~3・5・10~16と確認できた。柱穴の掘り込みは0.18~0.51mと一様ではないが、0.30m前後が多く、全体的にやや浅い柱穴であった。

所見 総柱式から高床式の倉庫跡と捉えた。II地区においても総柱式建物跡は希である。

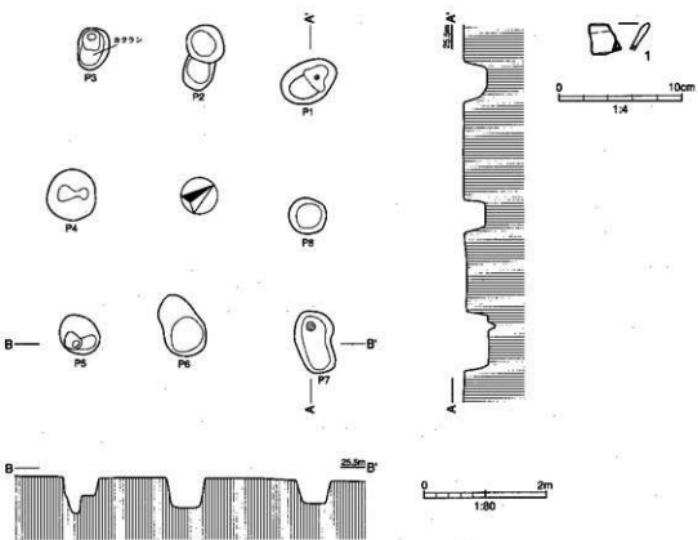


図272 B045

B045

検出地区 K7-66-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 2間×2間の掘立柱建物跡である。長軸4.61m×短軸3.58m、方位はN-53°-Wを示す。柱痕はP5・7のみに確認され、柱のアタリはP1・7にて認められた。しかし柱を引き抜くために柱穴の脇を掘ったものが、P1～4で認められた。柱穴の掘り込みは0.38～0.60mであり、0.45～0.48m程度が多かった。

小破片となった土器片が柱穴覆土から出土しているが、接合はできなかった。また、破片で判読不能だが、墨書き土器片が出土している。

所見 掘立柱建物跡の廃絶以後、柱の引き抜きと放置後の立ち腐れが混在する遺構であった。8本のうち4本が引き抜かれ、立ち腐れが捉えられたものは1本だけであった。本遺構は掘立柱建物跡の廃絶後の柱材の処置に対して、同一の建物跡で両者が混在することを示していたと考えている。ただ、放置した上での立ち腐れか、または、地上のみ切断し持ち去り、柱穴に埋まった部分のみの立ち腐れなのかは今後検討する課題として残されている。IV地区・V地区の掘立柱建物跡群の整理と併せて検討していきたい。

表272 B045遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	粘土	遺存	備考
1	上部器 坏	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書き 外体 「□」	

表78 挖立柱建物跡一覧表

(単位)m

遺構番号	検出区	周数	主軸方位	柱穴規模(長軸×短軸×深さ)	備考
		長軸	短軸		
B006	K7-74-3-4 K7-84-2	2×2	N-49°-W	P1 (0.82×0.77×-) P2 (1.15×0.62×-) P3 (0.81×0.75×0.63) P4 (0.89×0.70×0.59) P5 (1.32×0.79×0.60) P6 (0.85×0.81×0.60) P7 (0.68×0.66×0.53) P8 (0.84×0.59×-)	柱引抜
		3.98	3.94		
B007	K7-73-1-2-4	1×2	N-61°-W	P1 (0.63×0.60×0.18) P2 (0.62×0.57×0.53) P3 (0.71×0.64×0.21) P4 (0.78×0.55×0.22) P5 (0.59×0.52×0.34) P6 (0.56×0.47×0.32)	
		3.43	2.88		
B008	K7-72-4 K7-73-3 K7-82-2 K7-83-1	2×2	N-68°-E	P1 (1.18×0.95×-) P2 (0.83×0.78×-) P3 (0.92×0.68×-) P4 (0.87×0.79×0.72) P5 (0.97×0.91×0.58) P6 (0.80×0.69×0.56) P7 (0.93×0.92×0.74) P8 (1.07×0.95×0.53) P9 (1.11×0.95×-) P10 (-×0.95×0.52) P11 (-×0.82×0.47)	
		4.57	4.33		
B009	K7-44-3-4 K7-54-2 K7-55-1	2×4	N-52°-W	P1 (0.68×0.65×-) P2 (0.77×0.68×-) P3 (0.74×0.65×-) P4 (0.89×0.76×-) P5 (0.78×0.72×0.51) P6 (0.84×0.69×0.34) P7 (0.79×0.69×0.52) P8 (0.89×0.74×0.41) P9 (0.78×0.67×0.50) P10 (0.80×0.65×0.50) P11 (0.97×0.86×0.71) P12 (0.87×0.77×-)	P7鉄錆出土
		6.35	3.46		
B010a		2×3	N-58°-E	P16 (1.62×1.07×0.71) P6 (0.85×0.81×0.64) P7 (0.88×0.86×0.63) P17 (1.49×0.99×0.72) P9 (-×0.86×-) P10 (1.59×0.92×-) P11 (1.23×0.80×-) P12 (1.01×0.94×0.72) P21 (0.85×0.83×0.60) P22 (0.78×0.76×0.75)	墨書土器出土
		4.78	3.95		
B010b	K7-53-2-4 K7-54-1-3-4	2×3	N-33°-W	P1 (0.84×0.82×0.59) P2 (0.82×0.76×0.41) P3 (-×0.92×0.54) P23 (0.86×0.80×0.57) P24 (0.68×0.61×0.65) P17 (1.49×0.99×0.72) P9 (-×0.86×-) P10 (1.59×0.92×-) P11 (1.23×0.80×-)	
		5.10	3.46		
B010c	K7-63-2 K7-64-1	2×3	N-73°-E	P16 (1.62×1.07×0.71) P6 (0.85×0.81×0.64) P7 (0.88×0.86×0.63) P17 (1.49×0.99×0.72) P18 (0.86×0.80×0.54) P19 (0.96×0.85×0.58) P20 (0.82×0.69×-) P13 (1.03×0.94×-) P14 (-×0.78×-) P15 (0.78×0.71×-)	
		6.23	3.92		
B010z		×	- ° -		
				P25 (-×1.19×-) P8 (-×-×0.46)	
B011a	K7-43-2-4 K7-44-1-3	2×2	N-71°-E	P1 (1.15×0.82×-) P2 (1.75×0.80×0.62) P3 (1.09×0.82×0.60) P4 (1.14×0.83×0.50) P5 (0.72×0.71×0.31) P6 (1.12×0.76×0.52)	柱引抜 墨書土器出土
		4.73	4.05		
B011b		2×2	N-70°-E	P1 (1.15×0.82×-) P2 (1.75×0.80×0.62) P3 (1.09×0.82×0.60) P4 (1.14×0.83×0.50) P5 (0.72×0.71×0.31) P6 (1.12×0.76×0.52)	
		4.39	3.51		

遺構番号	検出区	間数	主軸方位	柱穴規模（長軸×短軸×深さ）		備考
		長軸	短軸	P1 (0.89×0.78×-)	P2 (0.83×0.69×-)	
B012a	K7-42-2-4 K7-43-1-2-3-4	2×3	N-73°-W	P3 (0.90×0.81×0.57)	P4 (0.92×0.78×0.52)	P9覆土中に多量の小磚
		6.66	5.04	P5 (0.95×0.77×0.59)	P6 (0.69×0.57×0.60)	
				P7 (1.25×0.51×0.47)	P8 (0.72×0.66×0.71)	
				P9 (0.84×0.67×-)	P10 (0.72×0.68×-)	
B012b	K7-52-2-4 K7-53-1	2×2	N-74°-W	P11 (0.85×0.83×0.61)	P12 (0.86×0.74×0.62)	P17覆土中に多量の小磚 覆土中粘土混合
		4.11	3.98	P13 (1.02×0.95×0.63)	P14 (0.90×0.83×0.50)	
				P15 (0.92×0.90×0.64)	P16 (0.79×0.72×-)	
				P17 (0.92×0.82×-)	P18 (1.24×0.83×-)	
B013	K7-52-2-4 K7-53-1	2×2	N-73°-W	P1 (1.03×0.92×0.52)	P2 (1.00×0.81×0.42)	P9
		4.37	3.70	P3 (0.81×0.60×0.61)	P4 (0.81×0.68×0.43)	
				P5 (1.03×0.90×0.53)	P6 (0.82×0.74×0.41)	
				P7 (1.05×0.86×0.70)	P8 (0.64×0.56×-)	
B014a	K7-53-3-4 K7-63-1-2-3-4	2×3	N-81°-E	P1 (1.11×1.07×0.62)	P2 (-×1.90×-)	灯明皿出土
		5.78	4.44	P3 (1.08×0.99×-)	P4 (1.16×0.89×0.91)	
				P5 (1.03×0.81×0.68)	P6 (1.04×0.96×1.00)	
				P7 (1.03×0.88×0.87)	P8 (1.04×0.89×0.81)	
B014b	K7-63-1-2-3-4	2×3	N-82°-E	P9 (0.98×0.89×1.04)	P10 (1.07×1.05×-)	
		4.55	3.40	P11 (0.86×0.79×-)	P12 (-×0.90×0.72)	
				P13 (-×0.78×0.51)	P14 (-×0.79×0.62)	
				P15 (0.89×0.83×0.50)	P16 (1.15×0.88×0.65)	
B015a	K7-62-1-2-3-4	2×2	N-12°-W	P17 (-×0.71×0.59)	P18 (0.70×0.70×-)	馬鹿土器出土
		4.53	3.64	P19 (-×0.85×-)	P20 (-×0.95×-)	
				P20 (-×0.75×0.46)	P21 (0.89×0.85×0.41)	
				P22 (0.84×0.82×0.51)	P24 (0.85×0.72×-)	
B015b	K7-62-1-2-3-4	2×3	N-17°-W	P4 (0.80×0.73×0.43)	P5 (0.75×0.72×0.51)	
		4.78	4.48	P30 (-×0.65×0.31)	P6 (0.71×0.68×0.56)	
				P8 (0.95×0.85×0.32)	P28 (0.62×0.47×-)	
				P12 (1.14×0.82×-)	P13 (-×0.96×-)	
B015c	K7-62-1-2-3-4	2×2	N-77°-E	P15 (1.05×0.81×0.55)	P16 (0.74×0.72×0.62)	
		3.27	2.94	P19 (0.96×0.84×0.70)	P25 (0.93×0.83×0.63)	
				P26 (0.87×0.72×0.13)	P12 (1.14×0.82×-)	
				P13 (-×0.96×-)		
B015z	K7-62-1-2-3-4	X	-°-	P18 (-×0.67×0.50)	P29 (-×0.72×0.46)	
				P31 (0.96×0.48×0.35)	P14 (-×0.71×-)	
B016a	K7-62-1-4	2×2	N-77°-E	P1 (0.75×0.70×0.42)	P2A (0.88×0.79×0.57)	
		2.87	2.78	P4 (0.75×0.64×0.55)	P5 (0.79×0.76×0.31)	
				P7 (-×0.75×0.43)	P9 (-×0.61×-)	
				P10 (0.77×0.65×0.41)	P12 (0.82×0.76×0.40)	

遺構番号	検出区	間数		主軸方位 長軸 短軸	柱穴規範 (長軸×短軸×深さ)	備考
		長軸	短軸			
B016b	K7-62-1-2-3 -4	2×2	N-3°-E	P3 (-×0.81×0.57) P17 (0.83×0.77×0.59) P8 (0.68×0.51×0.47) P13 (0.81×0.62×-)	P2B (-×-×0.44) P16 (0.78×0.59×0.42) P6 (0.79×0.61×0.53)	
		2.75	2.60			
B016z		X	-°-	P11 (1.06×-×0.32) P15 (1.26×0.84×0.29)	P14 (-×0.82×-)	
B017a	K7-61-3-4 K7-62-3 K7-71-1-2 K7-72-1	2×2	N-20°-W	P6 (0.79×0.65×0.42) P8 (0.69×0.67×-) P11 (0.87×0.86×0.38) P13 (0.94×0.73×0.46) P17 (0.88×0.77×0.45)	P7 (0.77×0.67×-) P10 (0.87×0.82×0.52) P12 (0.77×0.74×0.48) P14 (1.14×0.79×0.53)	縄刻土器出土
		4.48	4.35			
B017b		2×2	N-77°-E	P1 (0.74×0.72×0.53) P3 (0.88×0.81×-) P16 (-×0.83×-) P15 (0.62×0.59×0.28)	P2 (0.75×0.69×-) P5 (0.72×0.71×-) P14 (-×0.60×-)	
		4.03	3.66			
B017z		X	-°-	P9 (-×0.64×-)		
B018a	K7-51-4 K7-52-3 K7-61-2 K7-62-1	2×3	N-79°-E	P1 (0.86×0.73×0.58) P3 (1.01×0.65×-) P5 (1.19×0.85×-) P8 (0.75×0.71×0.54) P13 (-×0.93×0.53)	P2 (0.78×0.56×-) P4 (0.99×0.94×-) P6 (1.18×0.77×0.46) P10 (1.24×0.88×0.60) P15 (-×-×0.59)	墨書き器出土
		5.11	4.25			
B018b		2×2	N-88°-E	P9 (-×-×0.40) P12 (-×0.65×0.48) P16 (-×-×0.49) P18 (0.76×0.69×0.39)	P11 (-×0.71×0.47) P14 (-×-×0.61) P17 (0.81×0.65×-) P19 (0.70×0.64×0.43)	
		3.45	3.44			
B018z		X	-°-	P7 (0.36×0.34×0.32)		
B019a	K7-41-4 K7-42-3 K7-51-2 K7-52-1	2×3	N-82°-E	P1 (-×0.79×0.35) P6 (1.01×0.98×0.39) P9 (-×0.97×0.37) P22 (0.85×0.78×0.51) P17 (0.81×0.77×0.60)	P5 (-×0.78×-) P7 (1.03×1.02×0.39) P12 (1.26×0.97×0.48) P24 (-×0.75×0.48) P19 (1.49×-×0.47)	
		5.54	4.50			

遺構番号	検出区	間数	主軸方位	柱穴規模(長軸×短軸×深さ)		備考
		長軸	短軸			
B019b	K7-41-4 K7-42-3 K7-51-2 K7-52-1	2×3	N-82°-E	P3 (0.78×0.77×0.46) P21 (0.81×0.79×-) P11 (0.82×0.80×0.42) P14 (0.78×0.78×0.38) P16 (0.73×0.70×0.49)	P20 (0.77×0.72×-) P8 (0.83×0.81×0.58) P13 (0.93×0.75×0.52) P15 (0.87×0.79×0.51) P18 (0.51×0.41×0.47)	
		5.22	4.09			
		X	-°-	P2 (-×0.78×0.36) P10 (0.91×0.88×-) P25 (0.82×0.73×-) P27 (0.37×0.33×-)	P4 (0.90×0.88×-) P23 (-×0.85×-) P26 (0.60×0.47×-)	
B019z	J7-60-4 J7-70-2 K7-51-3 K7-61-1	2×3	N-19°-E	P1 (0.88×0.85×-) P3 (0.66×0.64×0.56) P5 (0.77×0.68×0.31) P7 (0.90×0.86×0.66)	P2 (0.86×0.72×-) P4 (0.75×0.61×0.36) P6 (0.86×0.64×0.54) P8 (0.85×0.75×0.65)	
		4.82	4.35			
B020	K7-43-4 K7-44-3 K7-53-2 K7-54-1	1×2	N-24°-W	P1 (0.65×0.55×0.53) P3 (0.58×0.44×0.40) P5 (-×0.80×0.71)	P2 (0.61×0.45×0.21) P4 (-×0.48×0.49)	
		3.26	2.18			
B021	K8-4-4 K8-5-3 K8-14-2-4 K8-15-1-3	2×2	N-39°-E	P1 (0.83×0.73×0.61) P3 (0.91×0.85×0.60) P5 (1.02×0.88×0.68) P7 (0.89×0.83×-)	P2 (1.05×0.93×0.72) P4 (0.82×0.80×0.69) P6 (0.98×0.92×-) P8 (0.90×0.79×-)	墨書き器出土(赤彩)
		4.36	3.42			
B022a	K8-4-4 K8-5-3 K8-14-2-4 K8-15-1-3	2×2	N-51°-W	P9 (0.82×0.79×-) P11 (1.02×0.95×0.52) P13 (0.98×0.87×0.62) P15 (0.86×0.74×0.49)	P10 (0.86×0.75×-) P12 (0.93×0.84×0.52) P14 (0.84×0.73×0.56) P16 (0.85×0.82×-)	
		4.78	4.41			
B022b	K8-23-4 K8-24-3 K8-3-2 K8-34-1	2×3	N-41°-W	P1 (0.77×0.68×0.22) P3 (0.82×0.71×-) P5 (0.82×0.78×0.49) P7 (0.71×0.71×0.43) P9 (0.75×0.74×0.22)	P2 (0.75×0.68×-) P4 (0.69×0.65×-) P6 (0.87×0.77×0.62) P8 (0.76×0.73×0.27)	
		4.94	3.19			
B023	K7-93-4 K7-94-3 K8-3-2 K8-4-1	2×2	N-42°-W	P1 (1.09×0.87×0.43) P3 (1.49×0.99×0.71) P5 (1.27×0.96×0.73)	P2 (1.01×0.96×0.80) P4 (0.93×0.81×0.42) P6 (0.80×0.75×-)	墨書き器出土
		4.36	4.15			
B024	K7-92-4 K7-93-3 K8-2-2 K8-3-1	2×3	N-47°-E	P1 (0.93×0.91×-) P3 (1.01×0.96×-) P5 (0.98×0.85×0.58) P7 (0.93×0.81×0.57) P9 (1.14×0.92×0.51)	P2 (0.91×0.82×-) P4 (0.98×0.96×0.70) P6 (0.96×0.89×0.69) P8 (1.10×1.07×0.48) P10 (0.79×0.78×-)	
		5.98	3.91			
B025a	K7-92-4 K7-93-3 K8-2-2 K8-3-1	2×2	N-43°-E	P11 (0.91×0.81×0.68) P13 (0.91×0.86×0.69) P15 (0.83×0.83×-) P17 (0.63×0.62×-) P19 (0.90×0.85×0.69)	P12 (0.92×0.72×0.58) P14 (0.82×0.82×-) P16 (0.75×0.71×-) P18 (-×0.96×0.61)	
		4.23	3.64			
B025b	K7-92-4 K7-93-3 K8-2-2 K8-3-1					

遺構番号	検出区	周数	主軸方位	柱穴規模（長軸×短軸×深さ）		備考
				長軸	短軸	
B026	K8-22-2-3-4 K8-23-1-3	2×3	N-55°-E	P1 (0.81×0.75×-)	P2 (0.76×0.76×-)	墨青土器出土
		6.32	3.32	P3 (0.59×0.55×-)	P4 (-×0.67×0.35)	
				P5 (0.82×0.75×0.49)	P6 (0.80×0.75×0.60)	
B027	K8-12-3-4 K8-22-1-2	2×2	N-41°-W	P7 (0.86×0.70×0.43)	P8 (0.73×0.67×0.29)	墨青土器出土
		4.47	2.79	P9 (0.95×0.69×0.44)	P10 (0.80×0.80×-)	
B028	K8-11-4 K8-12-3 K8-21-2 K8-22-1	2×3	N-55°-E	P1 (1.03×1.00×0.60)	P2 (1.00×0.99×0.59)	
		5.46	4.20	P3 (1.03×0.96×0.71)	P4 (0.92×0.85×0.79)	
				P5 (0.95×0.90×0.71)	P6 (0.97×0.83×0.62)	
B028z	K8-1-4 K8-11-1-2	×	- ° -	P7 (1.57×0.91×-)	P8 (0.89×0.88×-)	
				P9 (1.21×0.94×-)	P10 (1.36×0.93×-)	
B029	K8-1-4 K8-11-1-2	2×2	N-48°-E	P1 (1.14×0.91×0.70)	P2 (0.83×0.80×-)	
		5.19	3.68	P3 (0.83×0.71×-)	P4 (0.84×0.77×-)	
				P5 (0.86×0.73×0.61)	P6 (0.83×0.75×0.52)	
B030	K8-1-2-4 K8-2-1-3	2×3	N-42°-E	P7 (0.91×0.74×0.60)	P8 (1.05×0.92×-)	帶金具出土
		4.85	3.91	P9 (0.82×0.79×-)	P10 (0.86×0.75×-)	
				P11 (1.02×0.95×0.52)	P12 (0.93×0.84×0.52)	
B031	J8-10-4 K8-1-1-2-3-4	2×3	N-18°-W	P13 (0.98×0.87×0.62)	P14 (0.84×0.73×0.56)	
		6.18	3.50	P15 (0.86×0.74×0.49)	P16 (0.85×0.82×-)	
B032	K7-91-3 J8-10-2 K8-1-1	1×2	- ° -	P1 (1.05×1.01×-)	P2 (1.07×0.88×-)	
		3.34		P3 (0.91×0.86×-)	P4 (0.92×0.89×0.72)	
				P5 (0.93×0.80×0.67)	P6 (1.03×0.89×0.82)	
B033a	K8-21-2-4 K8-22-1-3 K8-32-1	2×3	N-27°-W	P7 (1.09×0.98×0.70)	P8 (0.85×0.84×0.61)	柱痕 4本
		5.31	4.56	P9 (0.79×0.76×0.69)	P10 (0.93×0.93×-)	
B033b	K8-32-1	2×2	N-63°-E	P1 (0.91×0.90×-)	P2 (0.80×0.79×-)	柱痕 1本 P14土師器・壺2点出土
		3.75	3.73	P6 (0.87×0.82×-)	P10 (1.09×0.79×-)	
				P24 (0.72×0.68×0.55)	P17 (0.88×0.86×0.52)	
				P18 (0.72×0.70×0.63)	P19 (1.02×0.96×0.62)	
				P20 (0.97×0.92×0.62)	P23 (0.81×0.74×0.62)	

遺物番号	検出区	間数	主軸方位	柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)	備考
		長軸	短軸		
B033z	K8-21-2-4 K8-22-1-3 K8-32-1	X	-°-	P9 (-×-×-)	
B035a	J8-30-4 J8-40-2 K8-21-3 K8-31-1	2×3	N-26°-W	P1 (-×0.76×0.49) P3 (0.95×0.91×0.50) P5 (0.97×0.73×0.37) P7 (0.78×0.69×0.49) P10 (1.04×0.95×0.58) P14 (0.94×0.86×0.60) P17 (1.02×0.64×0.45)	柱痕 4本
		6.20	3.73		
B035b	K8-31-1	2×2	N-31°-W	P17 (1.02×0.64×0.45) P19 (0.66×0.64×0.26) P9 (-×0.69×0.41) P13 (-×0.62×0.25)	柱痕 1本
		4.07	2.81		
B036a	J8-29-2-3-4 J8-30-1-3 J8-39-2 J8-40-1	2×3	N-20°-W	P1 (1.03×0.89×0.51) P3 (0.74×0.71×0.57) P6 (1.01×0.97×0.58) P10 (0.78×0.74×0.46) P14 (0.91×0.84×0.50)	墨書き器出土
		5.70	4.14		
B036b	J8-29-2-3-4 J8-30-1-3 J8-39-2 J8-40-1	2×3	N-59°-E	P18 (0.93×0.80×0.51) P20 (0.93×0.81×0.57) P9 (0.98×0.96×0.58) P13 (-×0.87×0.46) P17 (0.88×0.80×0.51)	柱痕 3本
		5.70	5.06		
B036z	J8-29-2-3-4 J8-30-1-3 J8-39-2 J8-40-1	X	-°-	P5 (0.84×0.73×0.24) P7 (1.40×0.88×0.20)	P5粘土混入 柱痕
B037a	J8-10-3-4 J8-20-1-2-3-4 K8-11-1-2	2×3	N-28°-W	P23 (0.84×0.75×0.31) P25 (0.76×0.72×0.59) P27 (0.81×0.77×0.52) P28 (-×0.72×-) P12 (-×0.89×0.48)	
		6.10	4.45		
B037b	J8-10-3-4 J8-20-1-2-3-4 K8-11-1-2	2×3	N-27°-W	P11 (1.07×0.75×0.56) P14 (0.98×0.94×0.19) P17 (0.94×0.93×-) P19 (1.00×0.96×0.48) P21 (0.92×0.91×0.45)	
		5.62	4.06		
B037c	J8-10-3-4 J8-20-1-2-3-4 K8-11-1-2	2×3	N-68°-E	P1 (0.89×0.84×-) P3 (0.98×0.98×-) P5 (0.99×0.88×0.72) P7 (1.00×0.96×0.67) P9 (1.04×0.95×0.79)	墨書き器出土
		6.20	4.48		
B037z	J8-10-3-4 J8-20-1-2-3-4 K8-11-1-2	X	-°-	P30 (0.69×0.66×0.36) P32 (0.75×0.74×0.36)	

遺構番号	検出区	間数		主軸方位	柱穴規格（長軸×短軸×深さ）				備考
		長軸	短軸						
B038	J7-100-3-4 J8-9-2 J8-10-1-2-3	2×3	N-68°-E	P1 (1.08×0.89×-) P3 (1.24×0.90×-) P5 (0.96×0.92×0.72) P7 (1.04×0.91×0.97) P9 (0.86×0.75×0.78)	P2 (0.95×0.86×-) P4 (1.19×1.05×0.80) P6 (1.15×1.02×0.87) P8 (0.91×0.91×0.92) P10 (0.89×0.86×-)	墨書き器 2片 建て替え 2棟か？			
		5.62	4.22						
B039a	J8-9-4 J8-19-2 J8-20-1	2×2	N-18°-W	P1 (0.87×0.81×0.78) P3 (0.78×0.73×0.90) P5 (-×1.00×0.98) P7 (0.90×0.87×0.92)	P2 (0.93×0.68×0.80) P4 (1.12×0.88×0.73) P6 (0.92×0.91×0.92) P8 (-×0.95×0.80)				
		3.81	3.60						
				総柱式？					
B039b	J8-19-1-2-3-4	2×2	N-71°-E	P1 (-×0.92×0.70) P3 (-×0.88×0.75) P5 (-×0.81×0.88) P7 (-×0.82×0.82)	P2 (0.94×0.84×0.64) P4 (-×0.69×0.64) P6 (-×0.96×0.82) P8 (-×0.90×-)				
		3.10	3.00						
				総柱式					
B040	J8-19-1-2-3-4	2×3	N-75°-E	P1 (1.43×0.98×-) P3 (0.94×0.94×-) P5 (1.02×0.90×0.58) P7 (1.40×1.03×0.49) P9 (1.11×1.01×0.70)	P2 (1.23×0.86×-) P4 (1.36×1.08×0.80) P6 (1.17×1.14×0.62) P8 (1.08×0.99×0.67) P10 (1.41×1.06×-)	墨書き器 「万」 P6.7覆土に粘土が柱痕状に入る			
		5.64	4.52						
B041	J7-98-4 J7-99-3 J8-1-2-4 J8-9-1-3	2×2	N-62°-E	P1 (0.91×0.85×-) P3 (0.68×0.67×0.39) P5 (0.74×0.69×0.50) P7 (0.74×0.72×0.43) P9 (0.94×0.92×-)	P2 (0.82×0.72×-) P4 (0.91×0.89×0.50) P6 (0.86×0.81×0.32) P8 (0.76×0.72×0.50)	南東柱列 3間			
		4.23	3.70						
B042	J8-11-3-4 J8-21-1-2	2×2	N-60°-W	P1 (0.85×0.81×-) P3 (0.83×0.82×0.49) P5 (0.78×-×0.43) P7 (0.92×0.88×0.47)	P2 (0.80×0.71×-) P4 (0.79×0.75×0.39) P6 (0.97×0.78×0.41) P8 (0.68×0.61×-)	柱 立ち廻れ 4本			
		4.53	3.98						
B043	J8-18-3-4 J8-28-1-2	2×2	N-90°-E	P1 (1.05×0.94×-) P3 (0.89×0.85×0.69) P5 (0.89×0.88×0.59) P7 (1.12×0.88×0.66)	P2 (1.14×0.98×-) P4 (1.08×0.76×0.49) P6 (1.02×1.01×0.59) P8 (0.94×0.92×-)				
		3.60	3.50						
B044	K7-55-4 K7-56-3 K7-65-1-2 K7-66-1	3×4	N-56°-E	P1 (0.93×0.80×0.51) P3 (0.93×0.72×0.44) P5 (0.65×0.61×-) P7 (0.85×0.71×0.28) P9 (1.16×0.60×0.18) P11 (0.67×0.58×0.33) P13 (0.77×0.63×-) P15 (0.65×0.60×-)	P2 (1.05×0.75×-) P4 (0.94×0.53×-) P6 (0.71×0.69×-) P8 (1.25×0.91×0.28) P10 (1.13×0.82×0.33) P12 (0.88×0.77×0.31) P14 (0.67×0.63×-) P16 (0.72×0.61×-)				
		5.03	4.05						
				総柱式					
B045	K7-66-1-2-3-4	2×2	N-53°-W	P1 (0.96×0.78×0.38) P3 (0.68×0.51×-) P5 (0.70×0.60×0.60) P7 (1.03×0.66×0.47)	P2 (1.08×0.62×-) P4 (0.84×0.77×-) P6 (1.06×0.61×0.48) P8 (0.61×0.58×0.45)	墨書き器 「口」 柱 引抜 4本 立ち廻れ 1本			
		4.61	3.58						

第3項 土坑

奈良・平安時代の土坑は14基検出されている。21地区及び22地区にやや多いが、調査区の全体面積からみると散在して所在する程度であった。当然集落の中で何らかの作業等の場としても、土坑は設けられたであろうが、そして遺構の用途や性格は様々であろうが、上谷遺跡Ⅱ地区としては少ない遺構数であり、その用途を捉えることはできなかった。

一方、奈良・平安時代の土坑のなかで、形状や掘り込み、覆土等が掘立柱建物跡の柱穴に似たものもあった。掘立柱建物跡の項で若干ふれたが、柱穴配置上で、いずれの建物跡にも属さない柱穴が存在したが、柱状のものを建てた施設を検討すべきかも知れない。そして今後は、単独で存在する柱穴状の土坑も堅穴住居跡との関係で見直す必要があろう。

いずれにしても奈良・平安時代の土坑については、Ⅱ地区でも遺構数が少なく、なかなか詳細に分析できない所があったが、以下、上谷遺跡Ⅱ地区における土坑を報告することとする。

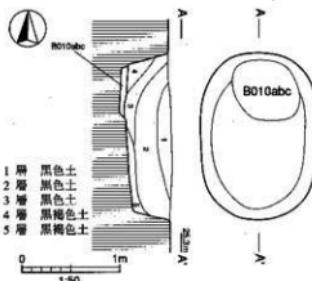


図273 D043

D043 検出地区 K7-53-4g他にて検出した。

遺構 長軸1.73m×短軸1.22m×深さ0.52m、方位はN-1°-Wを示す。平面形は楕円形である。坑底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒色土主体の、自然堆積であった。遺物の出土は多いが、図示できるものはなかった。

所見 BO10と重複するが、本遺構が柱穴を掘り込んでおり、D043が新しくつくられた土坑である。掘立柱建物跡の柱穴の方が坑底が深く、本遺構の坑底に残されたものである。なお、出土遺物から、平安時代の所産と捉えた。

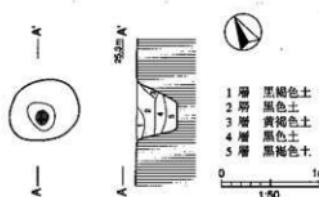


図274 D045

D045 検出地区 K7-44-2gにて検出した。

遺構 長軸0.75m×短軸0.63m×深さ0.42m、方位はN-90°-Eを示す。平面形は楕円形である。坑底は凹凸があり、柱のアタリが認められた。壁は垂直に立ち上がっている。覆土は人為的な体積と捉えられ、掘立柱建物跡の柱穴覆土に酷似している。遺物の出土はなかった。

所見 掘立柱建物跡の柱穴と考えられたが、対応する遺構がないため、土坑として扱うこととした。

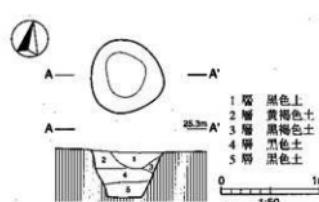


図275 D046

D046 検出地区 K7-34-3・4gにて検出した。

遺構 長軸0.77m×短軸0.74m×深さ0.46m、方位はN-11°-Wを示す。平面形は円形である。坑底に浅いピットがあるが、ほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がっている。覆土は、掘立柱建物跡の柱穴に類似するものである。遺物の出土はなかった。

所見 掘立柱建物跡の柱穴と思われるが、対応するものがなく、土坑として扱った。

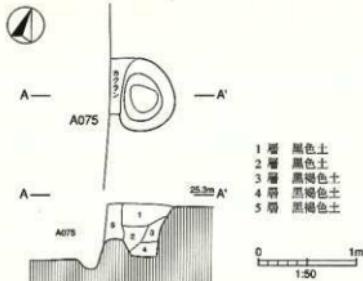


図276 D047

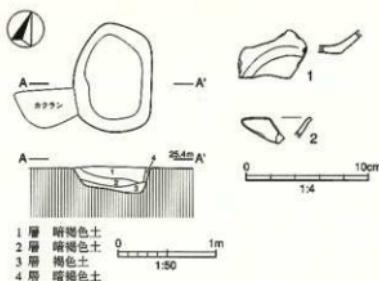


図277 D055

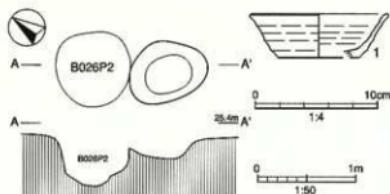


図278 D061

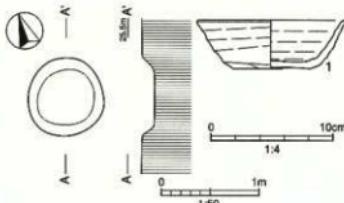


図279 D062

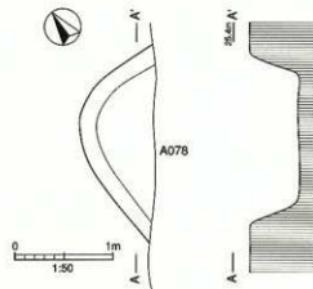


図280 D063

D047

検出地区 K7-53-4gにて検出した。

遺構 長軸0.76m×短軸0.55m×深さ0.54m、方位はN-18°-Wを示す。平面形は梢円形である。

坑底は平坦であり、形状は掘立柱建物跡の柱穴に類似する。人為的に埋戻された覆土であり、柱痕は確認されなかった。遺物は土師器片が1片のみ出土している。

所見 D046と同様、掘立柱建物跡の柱穴と思われるが対応するものがなく土坑として扱った。

D055

検出地区 K7-61-3・4gにて検出した。

遺構 長軸1.13m×短軸0.81m×深さ0.26m、方位はN-18°-Wを示す。平面形は歪んだ隅丸方形である。坑底は東壁に向かって傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒色味が強いもので、

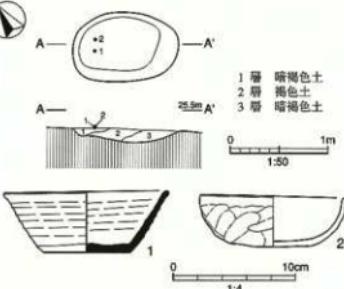


図281 D067

自然堆積である。遺物は土師器片が少量出土する。図示した遺物は、判読不能の墨書き器である。

所 見 土師器が出土することから平安時代の遺構としたが、覆土の黒色味が強く、より新しい時代の所産かも知れない。

D061

検出地区 K8-22-2・4g他にて検出した。

遺 構 長軸0.83m×短軸0.63m×深さ0.45m、方位はN-55°-Wを示す。平面形はやや丸味をもつ三角形である。坑底は南東壁に向かって傾斜し、壁はなだらかに立ち上がっている。ローム粒をわずかに含む黒色土を主体とする覆土であった。土師器片が出土して、1は口径(115)×底径(66)×器高36mmの壺である。

所 見 堀立柱建物跡の柱穴とも想定したが、土坑として取り扱った。

D062

検出地区 K7-92-4g他にて検出した。

遺 構 長軸0.81m×短軸0.78m×深さ0.12m、方位はN-20°-Eを示す。平面形は円形である。坑底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒色土主体の自然堆積であり、土師器片が少量出土して、1は口径(124)×底径(64)×器高31mmの略完形の土師器壺である。

所 見 用途は不明であるが、出土遺物から平安時代の所産の土坑と捉えた。

D063

検出地区 K8-3-3g他にて検出した。

遺 構 長軸・短軸は不明であるが、深さは0.48mであった。A074に掘り込まれ、形状は不明となっている。坑底は少し凹凸がある。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。ローム粒を若干包含する黒褐色土を主体とする覆土で、自然堆積である。土師器片が出土している。

所 見 A074に遺構の大半を掘り込まれており、形状等の不明点が多いが、A074より古い時期の所産と捉えた。

D067

検出地区 K8-11-3gにて検出した。

遺 構 長軸1.08m×短軸0.72m×深さ0.13m、方位はN-58°-Wを示す。平面形は梢円形である。遺構の深さは浅く、凹み状の遺構である。このため坑底から壁に向けて、なだらかに立ち上がっている。暗褐色土と褐色土が、斑状となった覆土を主体としている。

D067の遺構確認面において土師器と須恵器の壺がそれぞれ出土しているが、いずれもほぼ完形であった。1の須恵器壺が正位で出土し、2の土師器壺は倒置で出土している。

所 見 深さが0.13mと浅い凹み状の遺構であるため、覆土の堆積状態を捉えきれないところがあった。東方向からの流入土と捉えたが、遺物の出土状態からも人為堆積であるかも知れない。判断に迷う覆土堆積である。

表79 D067遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備考
1	須恵器 壺	13.5×7.00×5.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面静止ヘラケズリのため切り離し不明	暗灰 硬	雲母石 英長石 白色多	略完形	
2	土師器 壺	12.0×6.80×4.10 ロクロと想定される外体部全体に手持ヘラケズリ 底部一手持ヘラケズリ 完全に依る L1縁部一磨耗しているためミガキが消失 内面一丁寧なミガキ 逐次状の剥落多い	暗褐 硬	雲母 石英	略完形	

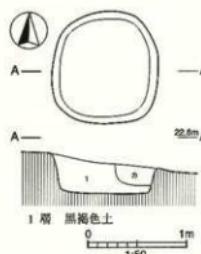


図282 D081

D081
検出地区 K-73-3gにて検出した。
遺構 長軸1.17m×短軸1.08m×深さ0.35m、方位はN-1°-Wを示す。平面形は方形である。坑底は平坦であり、壁は垂直に立ち上がりつておらず、遺構廃絶時の素早い埋没が想定された。覆土は人為的に埋戻されたもので、炭化粒が多く含んでいる。遺物の出土はなかった。
所見 斜面部に残された土坑であり、人為的に埋没させた土坑である。遺物は出土しなかったが、覆土等より奈良・平安時代の所産と捉えた。

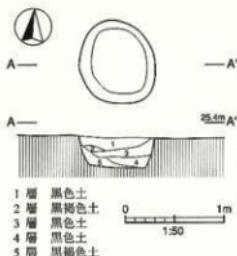


図283 D092

D092
検出地区 K-78-3gにて検出した。
遺構 長軸0.87m×短軸0.77m×深さ0.31m、方位はN-9°-Wを示す。平面形は梢円形である。坑底は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は人為的堆積であり、掘立柱建物跡の柱が引き抜かれた柱穴の覆土に類似する。遺物は縄文時代早期の撚糸文系土器片と土師器片が、混在して出土している。
所見 掘立柱建物跡の柱穴と捉えられる遺構であるが、単独のため土坑として扱った。撚糸文系土器片は縄文時代の炉穴や以後の竪穴住居跡からも出土しており、II地区の遺構配置から考えると早い段階で該期の包含層等が壊されていると捉えられている。

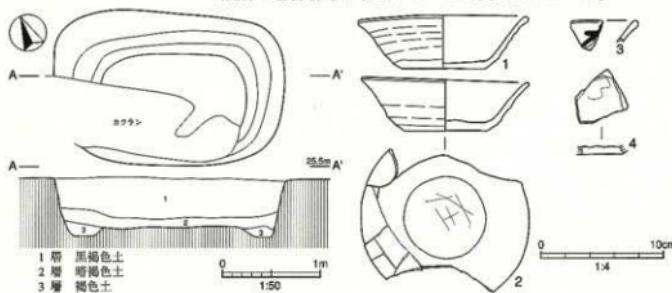


図284 D096

D096
検出地区 K-75-1・2gにて検出した。
遺構 長軸2.36m×短軸1.59m×深さ0.58m、方位はN-65°-Wを示す。平面形は長方形である。立川ローム層のクラック帯を坑底としているためか、平面としては捉えにくいものであった。しかし平坦につくろうとした意図は調査で見て取れた。一方、壁は凹凸が多く、雜に掘っているという印象を受けた。坑底の壁際には溝が巡り、周溝状となっている。周溝の幅は0.15~0.20m程度であり、掘り込んだ深さは不定となっており0.05~0.18mと一様ではなかった。覆土は黒色土を主体として、一気に埋戻したような状態であった。

遺物は土師器片を主体として126片の出土があり、土坑としては多い出土である。墨書土器と線刻土器が出土しており、2は外底に「在」と、また、4は内底に「得」と線刻されたものであった。

所見　出土遺物より平安時代の所産としたが、調査時において墓壙のような印象を受けた土坑であることを指摘したい。残念ながらそれに係わる明確な出土資料がなく、また、骨蔵器に類似する土器片も出土しなかったため断定はできなかった。

出土遺物は破片が多く、接合遺物も少なかった。しかし本土坑での線刻土器のひとつである「得」の文字は、II地区における出土文字資料の最大点数となっており、また、集落を象徴するような特徴的な文字となっている。本土坑の性格を捉える意味でも重要な出土といえるであろう。

表80 D096遺物観察表

(単位cm)

No	種器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	13.0×6.80×4.40 ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	明褐色～ 褐色 燒成硬	雲母 白色	略光形	
2	土師器 壺	13.8×6.80×4.20 ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	褐色 硬	雲母 石英 白色	略光形	線刻 外底 「在」
3	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体 「口」
4	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 底部一静止ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	-	-	底部片	線刻 内底 「得」

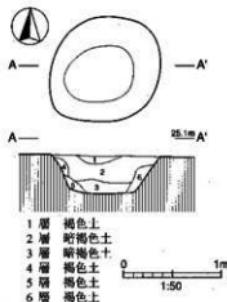


図285 D101

D101

検出地区 K7-21-3g他にて検出した。

遺構 長軸1.27m×短軸1.08m×深さ0.38m、方位はN-38°-Eを示す。平面形は楕円形である。ハードロームの坑底は東壁に向かってやや緩い傾斜となっており、壁はやや急に立ち上がっている。覆土は、人為的な土砂の投入を窺わせるものであった。遺物は土師器の小片が若干出土している。

所見 少量ではあるが、出土遺物から平安時代の所産と捉えた。また、壁際には褐色土を中心としてやや複雑な堆積をみせる土坑であるが、人為的に土砂を投入して埋没させた土坑である。竪穴住居跡を含めて、II地区における整地し平坦面を作り出すかのような人為的な土砂投入が、集落の意識として行われていたようであり、本遺構もその例の一つとなっている。

D102

検出地区 J7-30-2gにて検出した。

遺構 長軸0.79m×短軸0.67m×深さ0.19m、方位はN-77°-Eを示す。平面形は楕円形である。坑底はソフトロームで、ほぼ平坦であった。壁は、やや斜めに立ち上がっている。覆土は、自然堆積である。土師器小片が2点のみ出土している土坑である。

所見 少量ではあるが、出土遺物から平安時代の遺構と捉えた。用途は捉えられなかった。

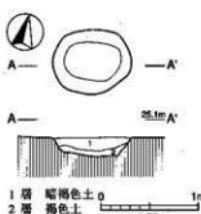


図286 D102

第4節 中世以降



図287 中世以降の遺構配置図

本節では、中世及び近世に属すると考えられる遺構、また、縄文～奈良・平安時代に属するものとは明確に判断できない遺構を扱うこととした。特に本節で扱う遺構は、遺物の出土がないか、出土しても後世の流れ込みと捉えられたものであり、このため所属時代・時期を、中世、近世と区分できるものではなかった。そして遺構の一部は、近代に及んでいると考えられるものである。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、井戸状遺構1基、土坑9基であった。土坑には、炭窯というより炭穴と呼んだ方がよいものも含んでいる。また、遺構種別ではなく、まとめて報告することにした。

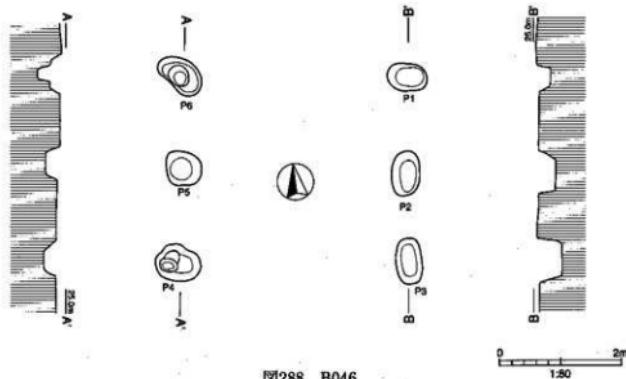


図288 B046

B046

遺構 K7-2-3g、K7-12-1gにわたって検出した。1間×2間の掘立柱建物跡であり、桁行3.71m×梁行3.05m、方位はN-7°-Wを示す。覆土は、暗褐色土を主体としており、柱は引き抜いていた。遺物は出土しなかった。

所見 柱穴の覆土から、奈良・平安時代には属さず、中世以降の所産と捉えられた。単独の掘立柱建物跡である。

表81 B046遺構計測表

(単位m)

遺構番号	検出区	間数	主軸方位	柱穴規模(長軸×短軸×深さ)	備考
		長軸	短軸		
B046	K7-2-3 K7-12-1	1×2	N-83°-W	P1 (0.81×0.47×0.39) P3 (0.73×0.59×0.20) P5 (0.71×0.47×0.26)	柱・引抜
		3.71	3.05	P2 (0.65×0.58×0.23) P4 (0.75×0.43×0.38) P6 (0.66×0.47×0.20)	

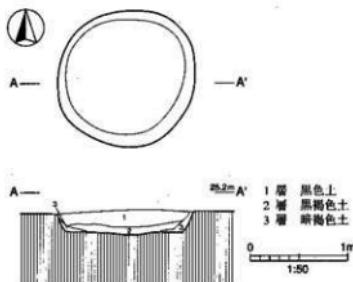


図289 D049

D049

遺構 J7-40-4g、J7-50-2gにわたって検出した。

長軸1.43m×短軸1.41m×深さ0.25m、方位はN-0°-Eを示す。平面形はほぼ円形に近い隅丸方形であり、全体としては壺状の遺構である。ソフトロームを掘り込み坑底とし、平坦であった。覆土は、黒褐色土と暗褐色土の自然堆積である。遺物は出土しなかった。

所見 遺構確認面で、はっきりとしたプランで捉えられた土坑である。このことから、新しい時代の所産と捉えた。用途は不明である。

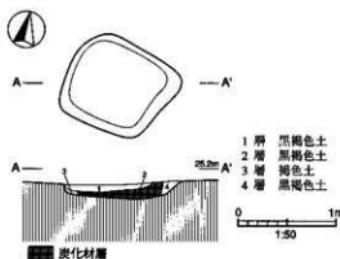


図290 D052

D052

遺構 J7-50-3gにて検出した。

長軸1.10m×短軸0.96m×深さ0.15m、方位はN-74°-Wを示す。平面形は方形である。ソフトロームの坑底は、東壁側に緩く傾斜している。坑底を中心には炭化材層があり、その上は暗褐色土の人為的な埋め戻しが行われている。遺物は出土しなかった。

所見 ハードロームまで四角形に掘り込んだ、土坑状の炭窯である。炭窯と言うより、炭焼き穴と言うべきかも知れない。

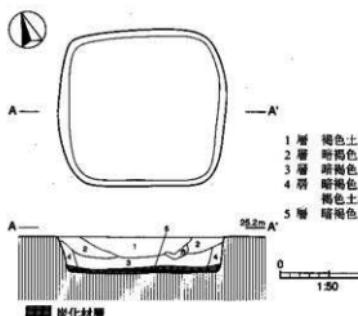


図291 D053

D053

遺構 J7-49-4gにて検出した。

長軸1.73m×短軸1.63m×深さ0.38m、方位はN-82°-Wを示す。平面形は方形である。坑底はハードロームであり、平坦である。壁は垂直に立ち上がっている。坑底直上に炭化材層があり、その上は暗褐色土を主体とした人為的な埋め戻し層である。遺物は出土していない。

所見 ハードロームまで四角形に掘り込んだだけの、土坑状の炭窯である。本格的な生業とされる炭窯と異なり、粘土や砂等で窯を築いているのではなく、炭焼きの原理を応用した炭焼き穴とも言うべきものである。いわゆる「自家消費分」の炭を焼くような小規模な炭窯であり、中世以降の上谷遺跡の姿の一端をあらわしていると言えよう。

D074

遺構 J7-99-4gで検出。

長軸1.61m×短軸1.25m×深さ0.46m、方位はN-73°-Wを示す。平面形は三角形状で、断面は壠鉢状となっている。このため坑底の範囲は明瞭ではない。ハードロームを掘り込み坑底とし、若干凹凸をもちらながら、壁が立ち上がる土坑である覆土は褐色土を主体とした自然堆積であり、出土遺物は縄文や土師器片が出土している。

所見 当初は縄文時代の土坑かと捉えられていたが、木根の影響が大きく、時期を判断する資料が乏しい土坑である。

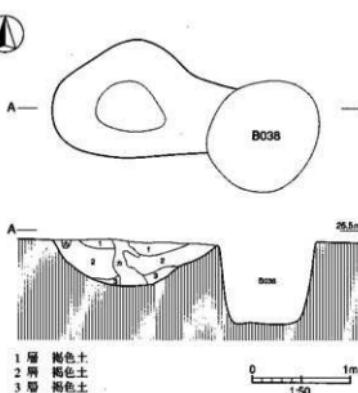


図292 D074

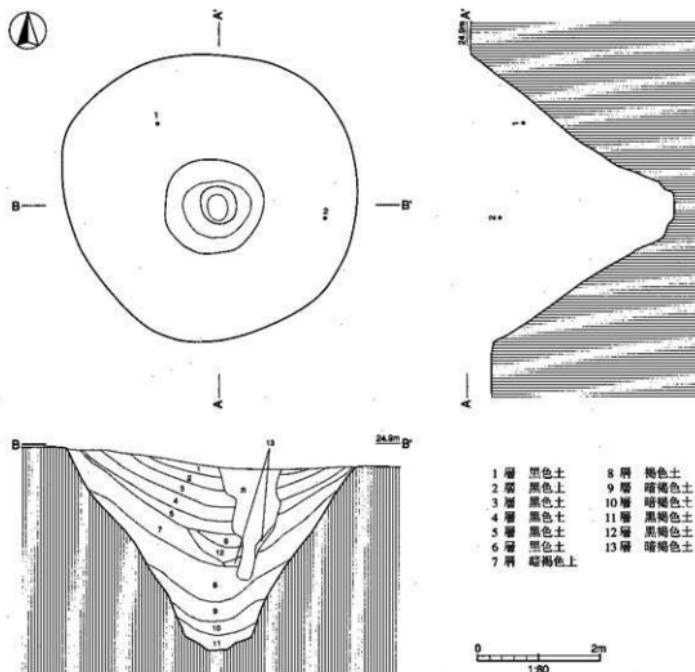
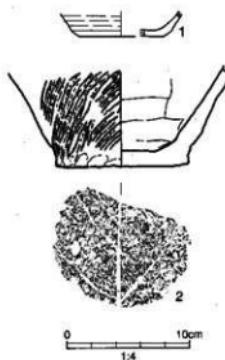


図293 D075



D075

遺構 K8-54-1~4gにわたって検出。長径3.13m×短径3.02m×深さ3.19m、長径方位はN-58°-Wを示す。平面はほぼ円形である。断面は坑底の狭い擂鉢状であり、坑底では常総粘土層を掘り込んだ深いピットを検出した。覆土は、下層はロームを多く混入した暗褐色土であり、上層は黒色土を主体としている自然堆積である。遺物は少ないが、縄文時代早期の燃糸文、弥生時代後期の土器片、土節器片が出土している。

所見 台地斜面のはじまりである、標高24.60~24.80mに所在し、常総粘土層を坑底とする井戸である。覆土下層は壁の崩壊ロームの堆積であった。遺物は出土状況から、流れ込みと捉えられた。周囲にピットが検出されず、撥ね釣瓶の井戸かは不明である。所属時期は、決定すべき資料がなく、中世以降の所産と捉えている。

表82 D075遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 成 形 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備 考
1	土師器 壺	—×(6.80)×(2.10) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	明褐色 硬	雲母多	1/5 底部	
2	弥生 甕	—×8.30×(6.00) 外面 痕部一付加条縄文 内面 ヘラケズリ 下端—ヘラケズリ	軟	砂粒多	1/4 底部	底面に木葉痕

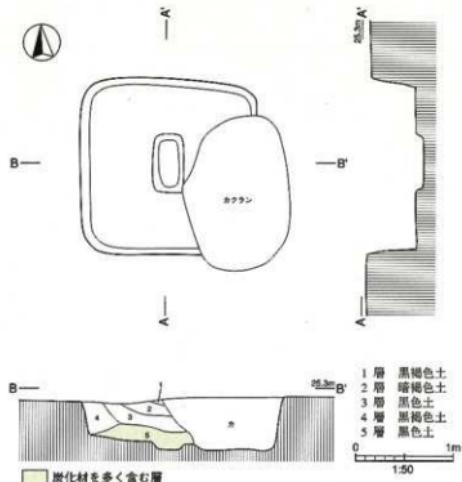


図294 D078

D078

遺構 K8-16-4g, K8-26-2gにて検出。長軸1.83m×短軸(1.78)m×深さ0.53m、方位はN-5°-Eを示す。平面形は方形である。ハードロームの坑底は平坦で、坑底中央にさらに長方形の浅いピットを掘り込んでいる。坑底から壁の立ち上がり付近は、焼土化はしていないが、火熱を被っている。覆土は、坑底直上層に多量の細かな炭化材が堆積し、その上には黒褐色土が埋め戻されている。遺物はなかった。

所見 近世以降の炭窯と考えられる。覆土は自然堆積のように見えるが、炭採取後に埋め戻したものである。

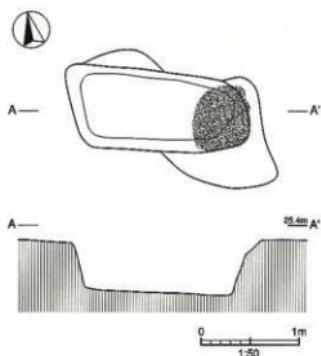


図295 D088

D088

検出地区 K7-66-2gにて検出した。
遺構 長軸1.93m×短軸0.83m×深さ0.65m、方位はN-105°-Eを示す。平面形は不整な長方形である。しっかりとした掘り込みで、ハードロームの坑底は平坦である。坑底の西から壁にかけて赤化している。覆土は坑底に赤褐色土を堆積した後に、褐色土が主体となる自然堆積であった。

所見 初当時は縄文時代の炉穴とも考えられたが、覆土等から中世以前の所産とした。

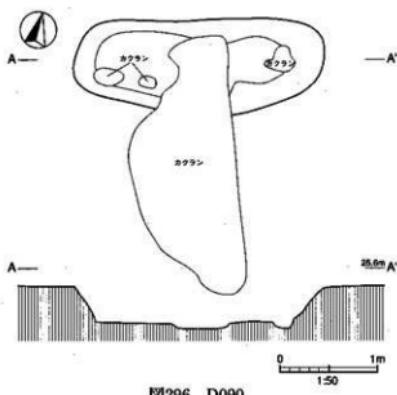


図296 D090

D090

検出地区 K7-68-2gにて検出した。

遺構 長軸2.56m×短軸0.97m×深さ0.37m、方位はN-77°-Eを示す。平面形は長方形である。

ハードロームを掘り込んだ坑底は平坦であり、壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土はローム粒を含んだ褐色土を主体とした、自然堆積であった。

所見 土師器小片が出土するが、覆土が奈良・平安時代と異なるため、中世以降の所産とした。

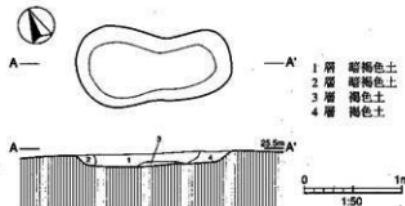


図297 D094

D094

検出地区 L7-41-3g他で検出した。

遺構 長軸1.58m×短軸0.84m×深さ0.14m、方位はN-65°-Wを示す。平面形は長椭円形である。ソフトロームを掘り込んだ平坦な坑底で、壁は斜めに立ち上がる。覆土は自然堆積であった。

所見 出土遺物がなく、覆土の状態も所属時期を想定できなかったため、中世以降とした。

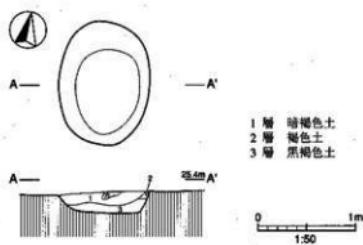


図298 D095

D095

検出地区 K7-49-1gにて検出した。

遺構 長軸1.27m×短軸0.92m×深さ0.22m、方位はN-3°-Wを示す。平面形は楕円形である。なだらかな壁の立ち上がりで、坑底は平坦であった。遺構確認面や坑底に近い深さで炭が検出されており、それは北側に寄っていた。

所見 炭窯とも想定されたが、炭化材と焼土が少なく用途は不明である。

第3章 小 結

以上、上谷遺跡Ⅱ地区の調査成果について報告してきたが、上谷遺跡は5地区に分けて報告するため、全体の姿が見えにくい側面がある。特に縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の遺構は、全地区に展開するため顕著である。ここではⅡ地区の調査成果について、その概要をまとめておきたい。

第1節 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、炉穴106基、土坑25基が検出されている。このうち早期後半・貝殻条痕文期の炉穴を主体とした遺構の検出であった。また、遺物は提示できなかったが、中期・五領ヶ台期の竪穴状の土坑も検出され、今後の上谷遺跡を考える上で貴重な成果を与えてくれた。D082では覆土中層から投棄されたハイガイを含む貝ブロックが出土し、旧鬼怒湾の一画である印旛沼との直接の係わりを捉えることができた。また、他の時代の遺構も含め、遺構の覆土中から撫糸文系土器も出土しており、上谷遺跡の縄文時代を捉える上で、新たな知見を加えている。しかし撫糸文系土器群に伴う遺構は検出されておらず、各遺構の検出状況から早い時代に該期の遺構は失われたと考えられる。

第1項 炉穴

大きく野島式期と茅山下層式期に分かれると捉えられるが、本遺構も上谷遺跡全地区に及んでおり、土器による時期的把握は最終段階で行いたいと考えている。ここではⅡ地区における遺構の検出状況について、若干触れたいと思う。

炉穴は遺構番号上106基を検出した。しかし遺構番号は同一であるが、ピットとして明確にその形状を分離できるものは118基となっている。また、各炉穴からは數カ所の火床が検出されたものもあり、火床総数は181カ所と捉えられた。重複によって失われた火床もあり、火床数はこれ以上と考えている。

炉穴の検出位置はおもに台地平坦より縁辺に所在しているが、特に、縁辺部に集中するという傾向はみられなかった。調査地区21~22地区と16~17地区にかけて、それぞれ西北から南東に帯状に所在する傾向が窺われた。17地区東側~16地区台地縁辺に至る地区には炉穴が極めて少なく、帯状に空白域が存在している。この空白域を境に炉穴の遺構分布は、大きく北東群（Ⅱ区A群）と南西群（Ⅱ区B群）の2群に分かれていた。A群はⅠ区からの炉穴のつながりであり、B群はⅢ区16地区南側へ連なる遺構配置であった。

第2項 貝ブロックについて

D082では拳大のブロックであったが、覆土中層においてハイガイを含む貝の廃棄が確認された。D082の報告においても触れたことであるが、ハイガイを伴う周辺地域の遺跡の状況や、上谷遺跡Ⅱ地区の周辺遺構から、早期貝殻条痕文期の所産と捉えた。縄文海進に伴い現在の印旛沼が海水に覆われていたことは周知されているが、縄文海進の最大時では、新川流域まで汽水が入り込んだことが指摘されている。Ⅲ地区以降も貝殻条痕文土器が伴う貝ブロックが検出されており、これについてはその整理と共に報告していきたい。

第2節 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居跡2軒と竪穴状の土坑1基の検出であり、上谷遺跡Ⅱ地区は本時代の生活領域として極めて少ない遺構数であった。そしてⅠ地区やⅢ地区的竪穴住居跡群からも、隔絶した様子

を示すものである。特に、明確に弥生時代後期後半の所産と捉えられる竪穴住居跡はA081の1軒であり、II地区の弥生時代は居住地域としては意識されていない場所のようであった。隣接してA079が残されていたが、出土遺物が極めて少なく、また、竪穴住居の平面形状から弥生時代終末から古墳時代初頭とも捉えられるものもあり、A081との比較検討が難しかった。このため居住地区として考えられなかったII地区における弥生時代は、上谷遺跡全体の中で検討されるべきことと考えている。

なお、I地区で報告したA028-12、A032-3、A043-3、A047-11・12、A054-2の遺物であるが、小型壺の底部乃至高台部や脚部として扱って報告しているが、再検討の結果、蓋型土器の破片として報告しなおしたい。

第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代は、上谷遺跡II地区における報告主体を占める時代である。竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡56棟、土坑14基を検出した。

土器からいくつかの時期に分かれるが、これについては上谷遺跡の全体として捉えたいと考えている。また、董田遺跡群での土器の分類と異なる資料も出土し、また、今後報告するIII地区以降でも紀年銘墨書き土器も出土しており、上谷遺跡の土器について検討していきたい。ここではII地区における調査の成果の一端について触れておきたい。

第1項 竪穴住居跡の人為的な埋戻しについて

上谷遺跡では竪穴住居の廃絶後の人の為的な堆積、住居廃絶時に一気に埋戻したような覆土堆積の竪穴住居跡が検出されている。掘立柱建物跡群が確認された当初は、これらを建てるため埋戻したのかとも思われたが、この掘立柱建物跡群とは異なる地区において数多く検出しており、今後の整理のために少し触れておきたい。

住居廃絶時に一気に埋戻したようなと捉えたが、埋戻し方は同様な土砂の一気の投入と、様々な方向から色調・包含物の異なる土砂の投入に分かれている。前者は竪穴住居跡の堆積覆土の分層が困難であり、覆土を1層としか捉えられないこともあった。後者は層の厚さや堆積状況が、複雑きわまりないものであった。埋戻し方は前者の例が多いが、この傾向はI地区でも捉えられており、II地区になると増大する傾向が示されている。この人為的な堆積がIII地区以降も捉えられるものなのか、今後の整理と絡み合っており、詳細な結果と検討については上谷遺跡の最終報告で触れたいと考えている。本項ではII地区について、若干まとめておきたい。

竪穴住居跡の人為的な堆積については、(1)竪穴住居廃絶時に一気に埋戻した住居、(2)埋没した竪穴住居跡を再利用の目的で掘り返し、その使用後に、再度埋戻した後に自然堆積によって埋没した住居、の2つの例が存在した。それは

(1)竪穴住居廃絶時に一気に埋戻した住居

A073・A075・A076・A078・A080・A082・A086・A098・A103・A104・A105a・A108

A111・A112・A113・A115・A116・A117・A118・A119・A120・A122・A123・A124

以上の24軒

(2)埋没した竪穴住居跡を再利用の目的で掘り返し、その使用後に、再度埋戻した後自然堆積によって埋没した住居

A075・A085・A087・A088・A092・A095・A100

以上の7軒(A075は人為堆積後、掘り返した例)

とに、大きく分けて捉えることが可能であったが、しかしこの2つの例は目的が異なると考えられ、このことについてII地区の状況から考えられることを少しまとめてみたい。

このような例はI地区でも検出されていたが、II地区では竪穴住居跡51軒のうち人為的な埋戻しの例は25軒が確認されており、異例な多さといえまい。しかもも当初は掘立柱建物群との関係で、人為的な廃絶・埋戻しが行われたのは掘立柱建物跡群の範囲ではないかと漠然と捉えていた。しかし図300のように人為的な埋没例の竪穴住居跡は、掘立柱建物跡群よりもその範囲外が多いことが捉えられた。確かに掘立柱建物跡群には竪穴住居跡が少ないが、II地区の南側から東側にかけて掘立柱建物跡群から少し離れた位置に所在する竪穴住居跡の埋戻しが目立っている。

これらのことは竪穴住居跡の廃絶後の不要な穴としての放置を認めず、整地して平坦な面を再構成しようとする集落の意識が窺われるものである。

(2) 竪穴住居跡の埋没後の掘り返しについて

竪穴住居跡の廃絶後の人為的な埋戻しや自然堆積後の埋没に係わらず、埋没後の掘り返し行為については掘り返した層に焼土や炭化材・粒を含むか、炭化材を含んでいなくとも焼土の混入等から、その掘り返しの目的の多くが、不用材などの焼却に伴うものと考えられた。II地区におけるこのような例は7軒であったが、調査区中央部の南西から北東にかけて直線的に連なる遺構配置であった。

上谷遺跡の広大な集落跡において、竪穴住居跡が当然ながら全て同時存在であったとは考えられず、また、覆土から自然堆積の埋没に任せた竪穴住居もあるなかで、凹み状に穴として残っていたであろう廃絶住居跡を用いずに、労力を必要とする埋没住居跡を再度掘り返した行為についても検討が必要となってくると考えている。

いずれにしても上谷遺跡のこのような行為の全体的な傾向が把握できない現状においては、III地区以降においても考慮しながら整理を進めていかたい。どちらの行為にしても集落の意識として平坦面をつくりだすことが窺えるものであるが、上谷遺跡を残した人々の全体像を捉える中で、捉えなおしたいと考えている。なお、本来は、住居廃絶時の人為的な埋没と、その後の掘り返す行為は分離して捉え直すものであろう。また、I地区の奈良・平安時代の竪穴住居跡の埋没経過については、今後さらに再検討の余地が残されていると考えている。

第2項 掘立柱建物跡について

上谷遺跡や栗谷遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡に付随して、掘立柱建物跡が検出されている。竪穴住居跡もいくつかの地区ごとの単位に群把握されるものであるが、それに付隨するように5棟前後の掘立柱建物跡が検出されている。上谷遺跡I地区では2間×3間が3棟、2間×2間が2棟の計5棟が検出されているが、II地区では掘立柱建物跡は増大し群把握ができるものとなっている。なお、掘立柱建物跡を報告するにあたり、I地区的掘立柱建物跡をI群、II地区をII群、III地区をIII群、IV～V地区をIV群としておきたい。ここで若干まとめるII群は、大きく東西の2群に分かれて捉えられ、群をさらに小群に捉るためにa群 b群としておきたい。

II地区では全体として57棟の掘立柱建物跡が検出されたが、1棟は中世以降の所産であり、56棟が奈良・平安時代に属する掘立柱建物跡である。検出地区は21地区・22地区・17地区にわたっているが、さらに22地区的東群(a群)と21～17地区的西群(b群)に建物配置として捉え直すことが可能であった。I地区や今後報告するIII地区的掘立柱建物跡と異なり、群として把握できるものである。

桁及び梁間は1間×2間が1棟、2間×2間が21棟、2間×3間が31棟、2間×4間が2棟、総柱式は2間×2間が1棟が検出されている。a群は2間×2間が13棟、2間×3間が12棟、2間×4間が1

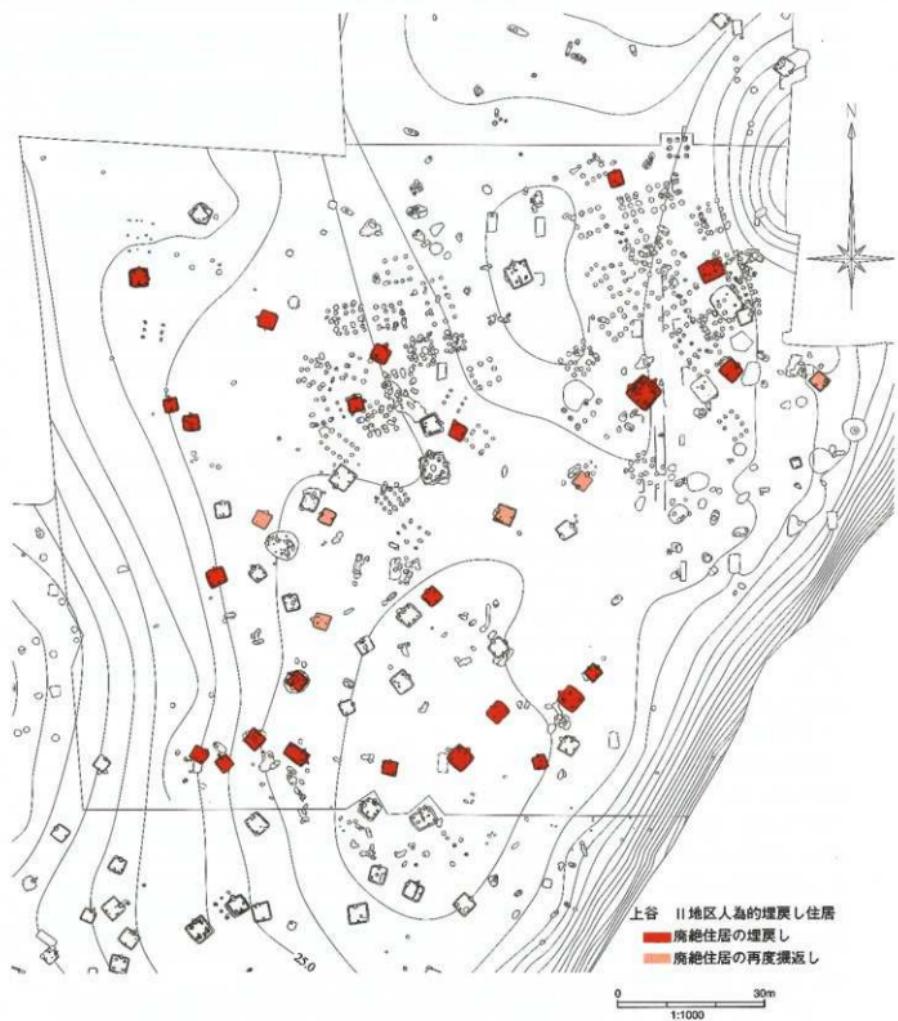


図299 人為的埋葬しと攝返しの竪穴住居跡の分布

棟の計26棟が検出された。b群は1間×2間が1、2間×2間が8棟（うち総柱式1棟）、2間×3間が21棟の計30棟が検出されている。a群とb群の間には建物跡の空白帯があり、これによって群を分けたが、a群は谷頭付近から台地平坦部に、b群は台地平坦部に占地していた。また、堅穴住居跡の希薄な地区に建てられていた。

II地区の掘立柱建物跡の中でやや特徴的なことは、2間×2間の小規模な建物が目立つことである。これが本地区的特徴となるのか、栗谷遺跡や向境遺跡、境掘遺跡を含めたものなのかは今後の整理に待たなければならないが、II地区では掘立柱建物跡のうち約37%を占めることとなり、I群と異なるものであるかも知れない。

一方、本地区的調査結果では、柱穴の覆土から柱痕の遺存が比較的多く確認されている。柱の引抜きもあったが、立ち腐れが多い結果となっている。重複した掘立柱建物跡でも古い柱穴に柱痕が残っているものもあり、古い建物の柱と新しい掘立柱建物跡が共存することとなり、一見、矛盾した様子を示していた。掘立柱建物跡の廃絶は自然放置による崩壊・柱の立腐れを考えるより、おそらく古い掘立柱建物跡は柱を含めて地上の施設を解体したが、柱穴内に残された柱は放置し、立腐れたものと思われる。なお、II群がつくられた目的等は、IV群との比較の中で捉えざるを得ず、検討課題として残されている。

第3項 墨書き土器について

八千代市の新川流域の奈良・平安時代の集落遺跡からは、数多くの墨書き土器（朱書き・線刻・範書きを含む）が出土している。千葉県内の墨書き土器はすでに20,000点を超えていといわれるが、八千代市内からはその10%以上を占めていると想定されている。上谷遺跡でも数多くの墨書き土器が出土しているが、整理が進行する中で、その総数が把握できない現状である。そのため、ここではII地区的墨書き土器について特徴的なことを報告するにとどめたい。

上谷遺跡II地区では、総数410点の文字等が記された土器が確認された。その内訳は墨書き土器は360点、朱書き2点、線刻33点、範書き15点となっている。I地区は総数65点であり、その出土数は飛躍的に増大している。この文字資料のうち破片等に記され判読不明のものが多いが、積分できるものは文意が捉えられる多文字及び長文のものと、1字乃至2字程度の単字に分けられ、出土点数は単字が主体であった。

(1) 単字資料について

判読できた文字は50文字を超えている。そして総数410点のうち、「得」が97点（墨書き93点・朱書き1点・線刻3点）、「万」が46点（墨書き45点・線刻1点）に上っている。また、範書き・線刻のみではあるが「×」が22点に及び、この3字がII地区において多い文字となっている。（×は文字とはいえないが、当面は文字として扱うこととする）。この他には「竹」8点、「仁」7点、「西」6点（うち重複あり）、「才」6点（うち重複1）、「生」5点、「竹野」4点となっていた。このことから「得」が、上谷遺跡II地区にとつて、格段に多い文字といえよう。また、「得」は26遺構（堅穴住居跡21軒・掘立柱建物跡5棟）、「万」は19遺構（堅穴住居跡14軒・掘立柱建物跡5棟）、「×」は堅穴住居跡のみだが13軒から出土していた。「竹」は7軒、「竹野」は堅穴住居跡3軒からの、それぞれの出土となっている。

ここで「得」「万」「×」を出土する遺構分布を図に示したが、「得」を出土させた遺構は調査区中央部に多く、掘立柱建物跡はa群が中心となっていた。さらにA102からは30点も出土し、A094・A115の11点がこれに次いでいる。「万」は調査区北東側に多く、掘立柱建物跡はb群に多い傾向がそれぞれ覗えた。A078が14点と多く、これ以外の遺構からは10点以下の出土であった。「×」はA102の4点と少なくなっている。また、「得」「万」「×」の3点を共に出土させる遺構は、A102（得31・万3・×4）、A115（11・3・2）A119（3・1・2）であった。「得」「万」はA074（得6・万1）A077a（2・6）A078（1・4）A

080 (1・1) であった。

萱田遺跡群のうち権現後遺跡は「生」が80点、井戸向遺跡は「富」37点、北海道遺跡は「富」25点と「万」17点、白幡前遺跡では「生」102点、「郭」38点等と、それぞれが出土点数の多さから、集落に特徴的な、または、その集団にとって象徴的な文字が抽出されている。同じように上谷遺跡Ⅱ地区の集落にとって、その集団を特徴づける文字としてこの出土点数と出土遺構数から、「得」と「万」はⅡ地区における集落の主体となる文字と捉えられると考えている。

(2)長文の墨書き土器について

上谷遺跡Ⅱ地区からは、多文字及び長文の墨書き土器12点と人面墨書き土器が1点出土している。多文字の中には、意味が解釈できた少数文字も入っている。出土した遺構はいずれも竪穴住居跡であり、出土軒数は9軒に及んでいる。Ⅱ地区の竪穴住居跡の遺構配置からは散在して出土しており、どの調査区に多いということは窺えなかった。

多文字及び長文が記された土器はいずれも土師器であり、壺10点、壺1点、小型壺2点である。13点のうちA088「三寶」とA099「下／□」、A124a「人面墨書き」は例外として、他の10点はその文意から「延命長寿祈願」の土器と位置づけられよう。A099出土の土師器壺に2行にわたり記された「下／□□」は、その文字以下に文は続かないが、「下」は下締と捉えられるかも知れない。なお、「廿」は前後に文字が認められなかつたため單字として扱つたが、祈願の日付として考えられるかも知れない。

A112からは、4点の人名墨書き土器が出土している。いずれも「丈部」の部姓が記されているが、名前は4人であった。性別は男1人、女2人、不明1人となっている。祈願日は「二月」乃至「二月十五日」とされていた。この土器で特筆すべきことは、萱田遺跡群等の例では「(郷名) + 部姓 + 名前 + 召代(目的) + (祈願年月日)」が多かったが、この4点には名前と召代の間に「身」の文字が記されていたことである。「身召代」を「身を召される代わり」(註1)と釈文すると、祈願目的が一層明瞭化したものとなっている。

また、A116の「物部真依 延暦十年十一月七」の人名・紀年銘土器は、八千代市内のこのような「祈願の土器」としては初めての部姓の出土であった。権現後遺跡の「村神郷物部國依甘魚」、井戸向遺跡「丈部乙刀自女形代」、A114の4点の例のように、このような「祈願」に使用された土器は、今までの所いずれも「丈部」姓であり、村神郷の「延命長寿」祭祀の主体者が丈部が中心ではなかったかと捉えられてきたところである。この土器の出土により、丈部姓のみならず、他の姓も祭祀を行っていたことが新たな知見として加わったといえよう。

なお、A116の墨書き土器は所謂「箱形」の土師器壺であり、紀年銘と土器の形態の所属時期が異なってくるものであった。この土師器壺の形態は8世紀第3四半期に終焉を迎えるとされるものであるが、延暦10年は西暦791年であり、この土器の形態の再検討が必要かも知れない。土器が伝世するとしても10年余もの期間があり、古い土器を使用したとは考えにくいものであった。この形態が器形の主体とはなり得せず、量的には減少しながらも8世紀末まで下ると考えることが妥当ではあると考えている。しかし整理が進行中の上谷遺跡の中では、全体の土器群をおさえられておらず、現段階では器形と紀年銘の連和を指摘するにとどめたい。

Ⅲ地区以降多くの墨書き土器が出土しており、Ⅱ地区の資料だけでは検討できないところがある。今後報告する地区でも、さらに長文の墨書き土器が出土しており、整理が進行するに従い、新たな知見が得られると思われる。今回は、「得」「万」「×」を集落の特徴的な土器として捉えたが、今後の整理によっては調査地区ごとに特徴的な文字が変わるかも知れない可能性を指摘しておきたい。

註1 平川南氏(国立歴史民俗博物館副館長)のご教授による。

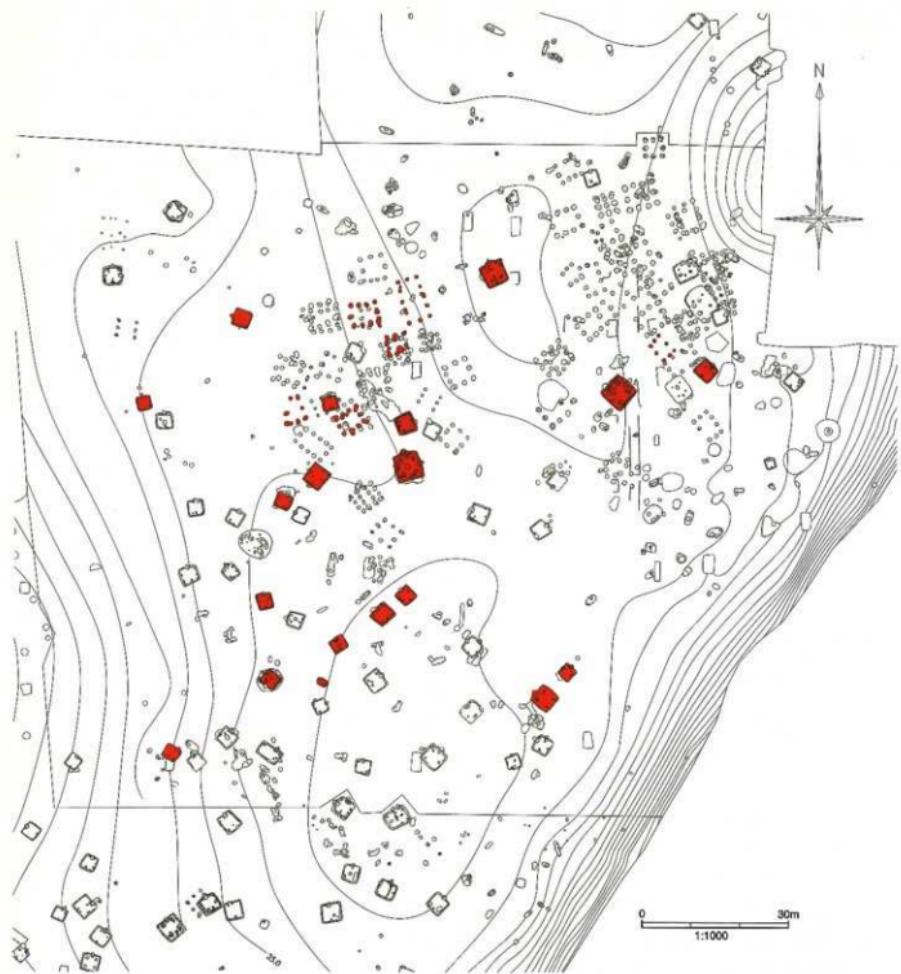


図300 上谷遺跡II地区出土文字「得」を出土する遺構

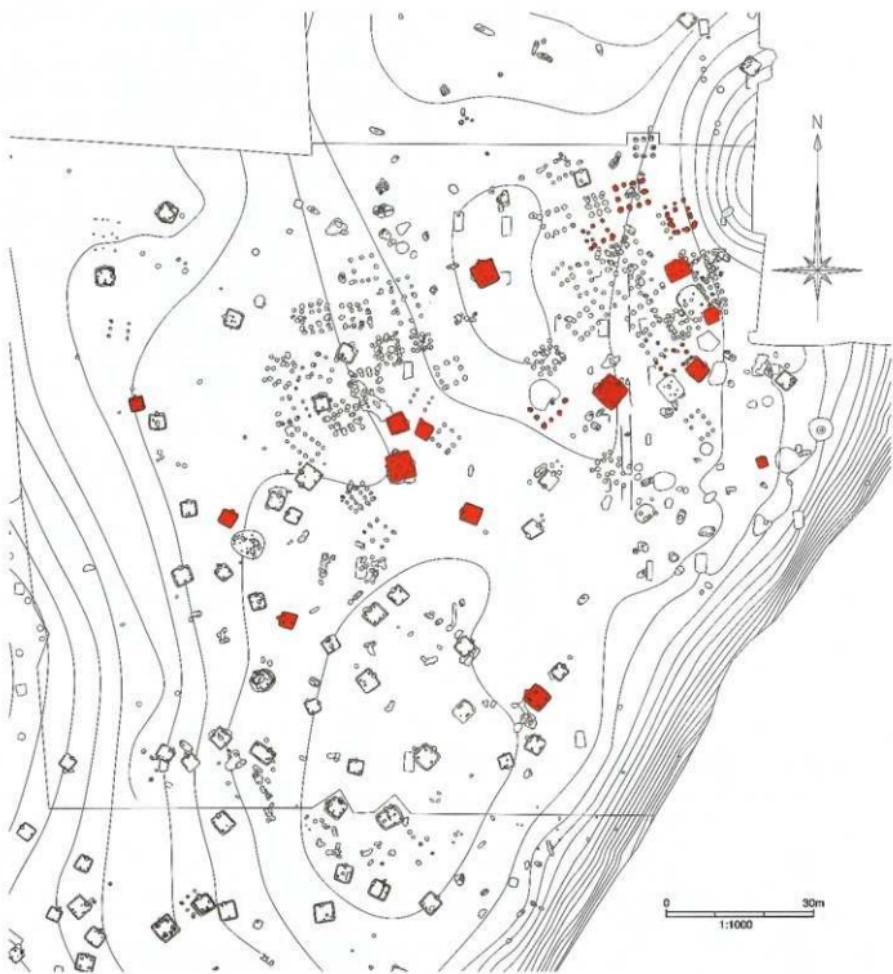


図301 上谷遺跡II地区出土文字「万」を出土する遺構

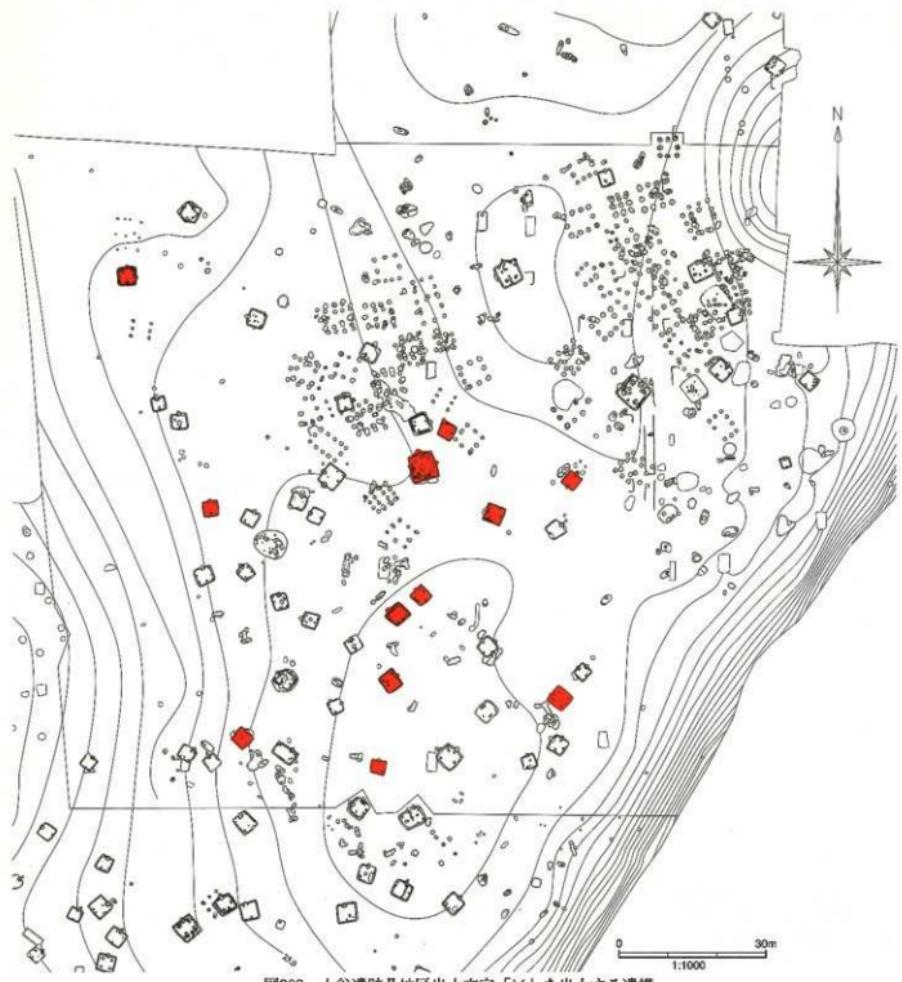


図302 上谷遺跡II地区出土文字「X」を出土する遺構

表83 出上点数の多い文字と出土遺構

		出 土 遺 構				
字	種別	A074 (6)	A075	A077a (2)	A078	A080
得	墨書	A091	A093	A088	A091	A093
		A094 (11)	A096	A097 (4)	A098 (2)	A102 (30)
		A105 (2)	A115 (11)	A116 (2)	A118 (3)	A119 (3)
		A124a	B010a	B011	B015a (2)	B018a (4)
	朱書	A102				B027
	線刻	A118	B017	D096		
万	墨書	A073	A074	A077a (6)	A078 (14)	A080
		A082	A084 (4)	A086	A088	A092
		A100	A102 (3)	A115 (3)	A119	
		A024	B026	B036a	B037a (2)	B040
×	墨書	A078				
	範書	A073	A097	A098 (2)	A100 (2)	A113
		A121				
×	線刻	A085	A097 (2)	A102 (4)	A103	A107
		A108	A115 (2)	A119 (2)		
竹	墨書	A078 (2)	A088	A094	A115	A119
竹野	墨書	A123	A124a			
		A097	A100 (2)	A104		

表84 長文の墨書き器

長 文	器 種	位 置	出 土 遺 構	備 考
村神郡 召	土師器	坏	体部外面 正位	A082
三寶	土師器	坏	体部外面 正位	A088
下 □	土師器	壠	脚部外面 正位	A099 2行
口神御口 口真廿九日	土師器	小型壠	脚部外面	A103
口神御火口	土師器	坏	体部外面	A109
口四日口	土師器	坏	体部外面 正位	A109
丈マ麻口女身召代二月十五日 西	土師器	坏	体部外面 外底部	A112 西は正位 丈マ～は横位
丈マ真里刀女身召代二月十五日	土師器	坏	体部外面	A112
丈マ口口身召代二月／西	土師器	坏	体部外面 内底部	A112 丈マ～は横位
丈マ福依身召代二月十五日	土師器	坏	体部外面	A112
口藤御口	土師器	坏	体部外面	A115
物部真依 延暦十年十一月七日	土師器	坏	体部外面	A116
(人面)	土師器	小型壠	脚部外面 正位	A124a LI縁～刷上半

表85 出土文字資料一覧

番号	积文	種別	数 量
1	×	ヘラ書	8
		線刻	14
2	月	墨書	45
		線刻	1
3	加	墨書	5
4	得	墨書	93
		線刻	3
		朱書	1
5	長	墨書	1
6	仁	墨書	7
7	生	墨書	5
8	次	墨書	1
9	火	墨書	1
10	不	線刻	1
11	○	墨書	3
12	家	墨書	1
13	竹	墨書	8
14	人	線刻	1
15	才	墨書	6 (1)
16	西	墨書	6 (1)
17	正	墨書	1
18	竹野	墨書	4
19	ト	墨書	1
20	十	線刻	1
21	丁	ヘラ書	1
22	ノ	ヘラ書	1
23	山	墨書	2
24	士	線刻	1
25	人	墨書	2
26	火	線刻	2
27	井	線刻	1
28	大	ヘラ書	1
29	在	線刻	4
30	人	線刻	1
31	千	墨書	1
32	十	線刻	1
33	米	線刻	1
34	一	ヘラ書	3
		線刻	1

番号	积文	種別	数 量
35	一	墨書	1
		ヘラ書	1
36	折	墨書	1
		墨書	1

※()内同一土器

写 真 図 版



上谷遺跡全景（南西方向から）

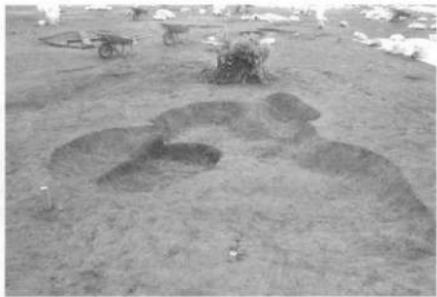


上谷遺跡II地区全景

図版 2



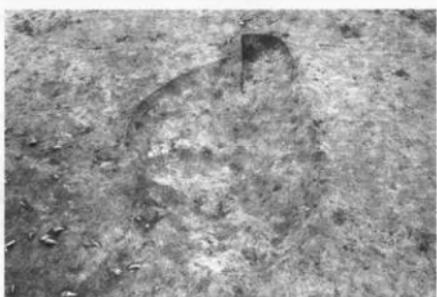
A089



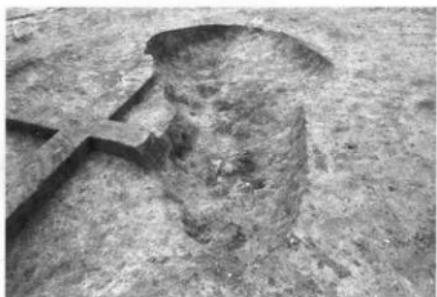
F033



F034



F035



F036



F037



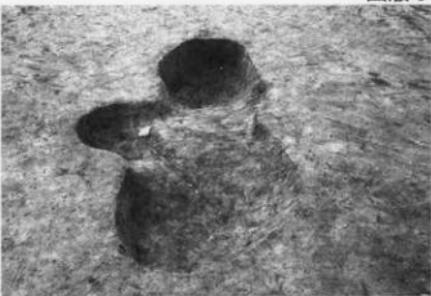
F038



F039



F040



F041



F042a.b



F043



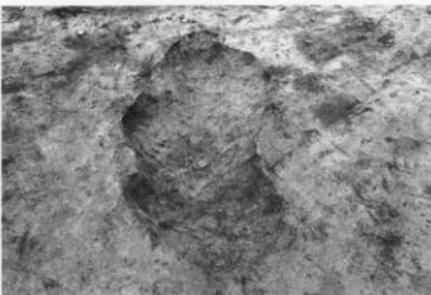
F045



F046

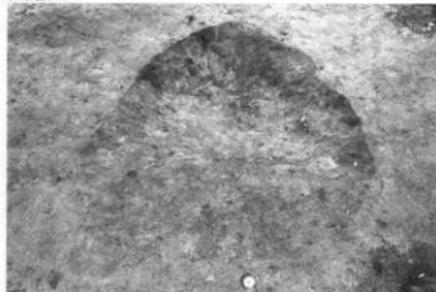


F047



F048

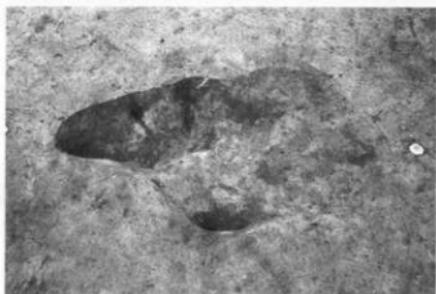
図版 4



F049



F050



F051



F052



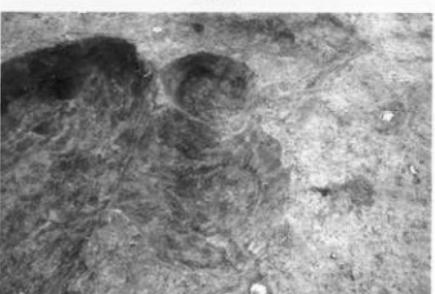
F053



F054



F055



F056



F057



F058



F059a.b



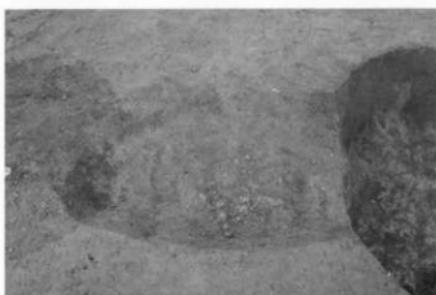
F060



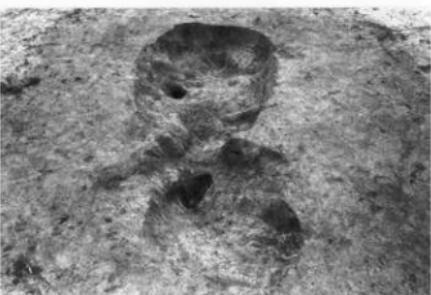
F061



F062a.b

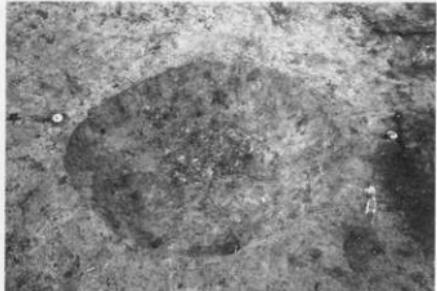
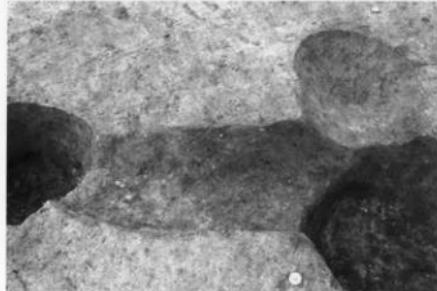


F063



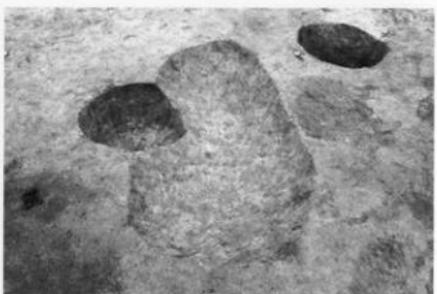
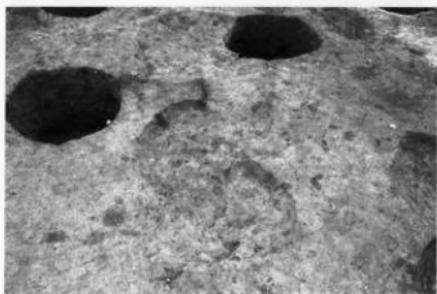
F064

図版6



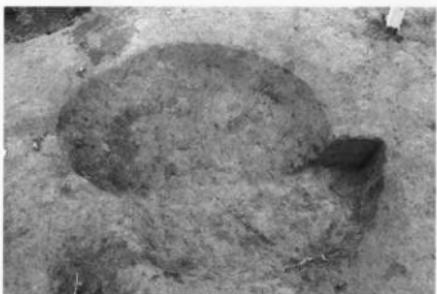
F065a,b

F066



F067a,b

F068



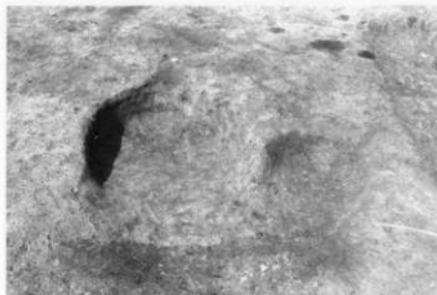
F069

F070

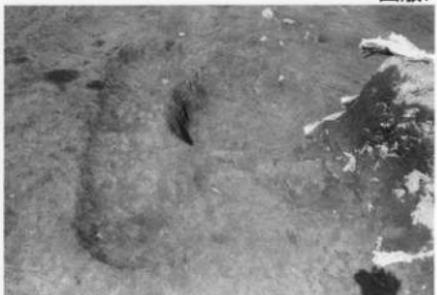


F071

F072



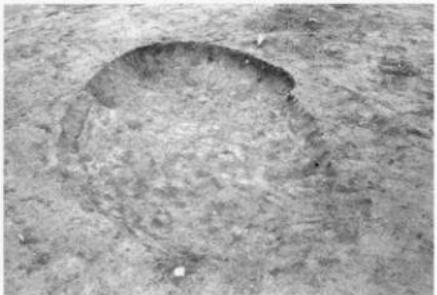
F073



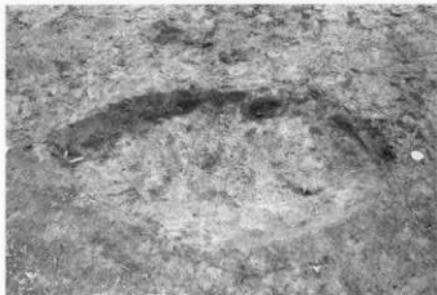
F074



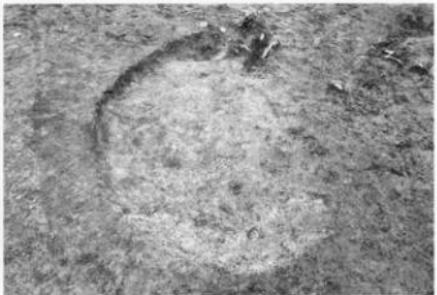
F075



F076



F077



F078



F079

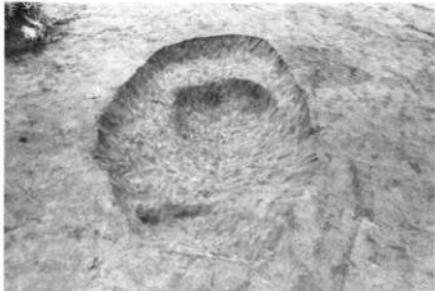


F080

図版8



F081



F082



F083



F084



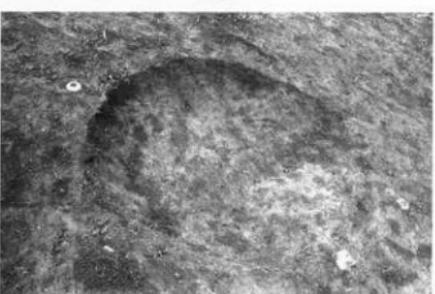
F085



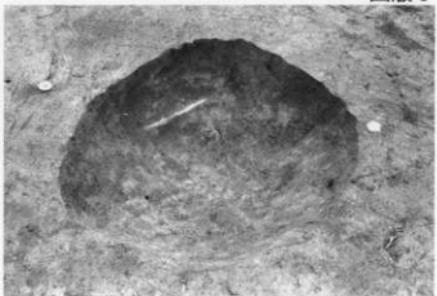
F086



F087

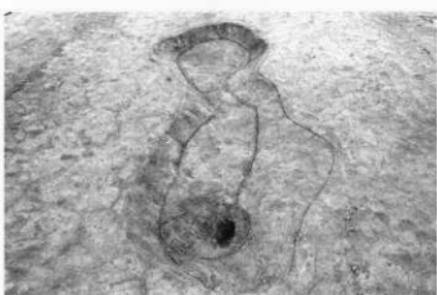


F088

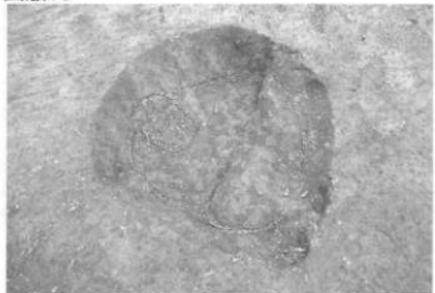


F091・F092

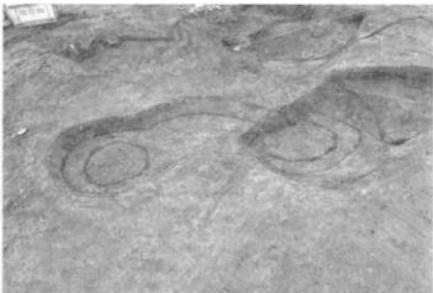
F092掘方



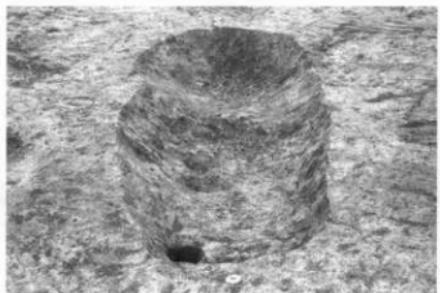
図版10



F097



F098a.b



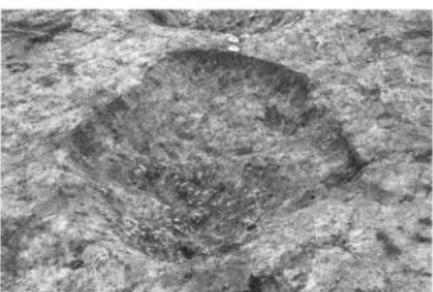
F099



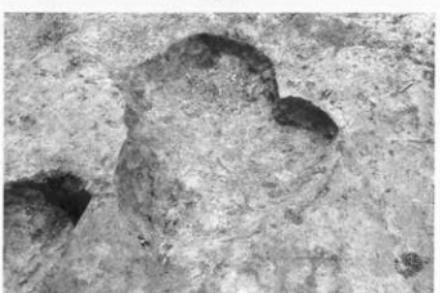
F100



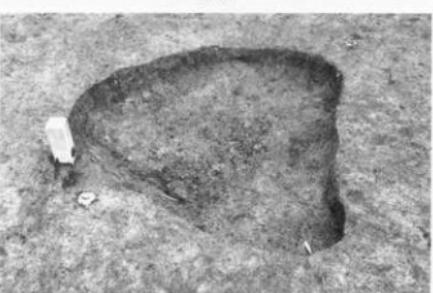
F101



F102



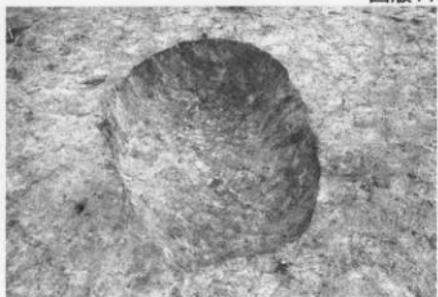
F103



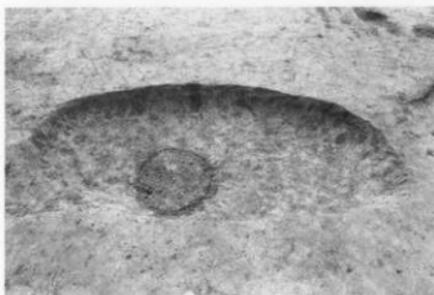
F104



F105



F106



F107



F108



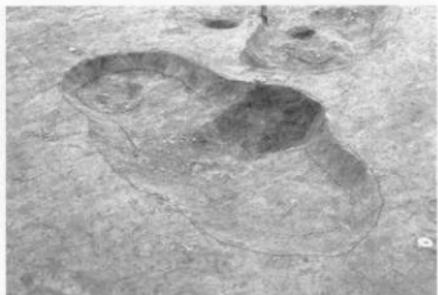
F109



F111



F112a.b

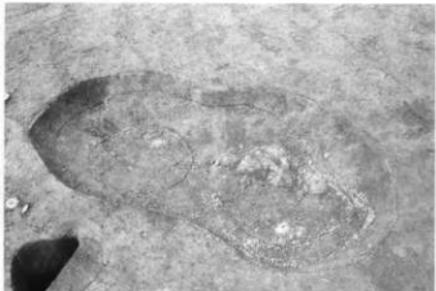


F113

図版12



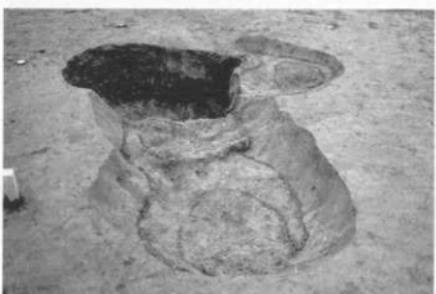
F114



F115



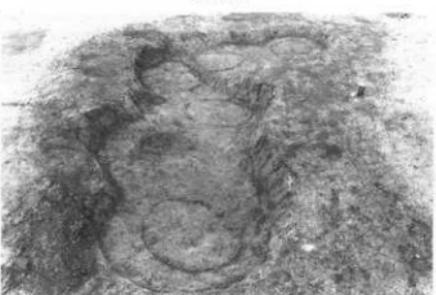
F116



F117a.b



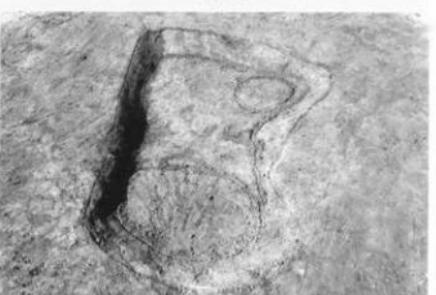
F118a.b



F119a.b



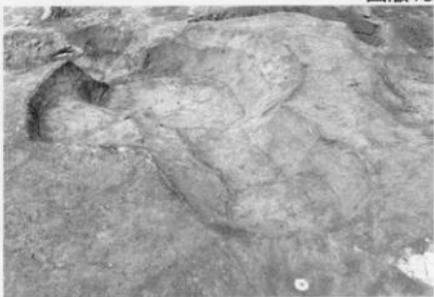
F120



F121



F122a.b



F123



F124a.b



F125a.b



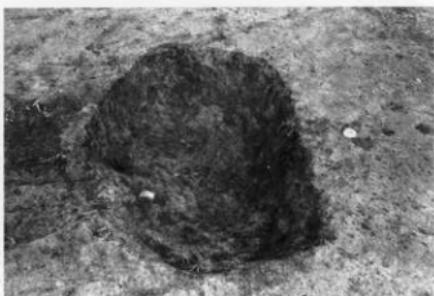
F126a.b



D044



D048

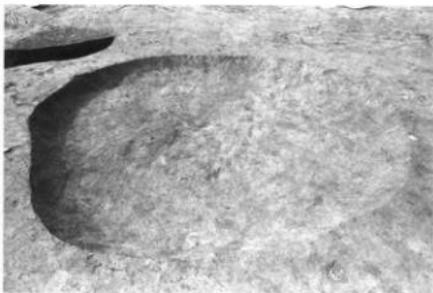


D050

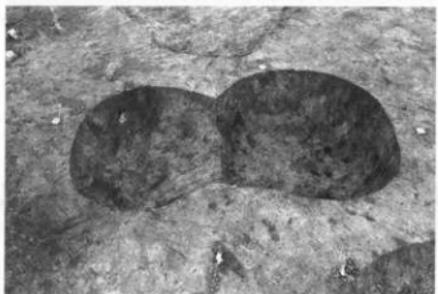
図版14



D051



D056



D057a.b



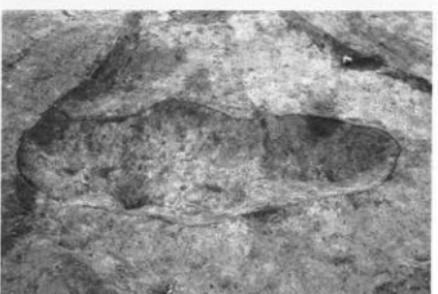
D058



D059



D064



D065



D066



D068



D070



D071



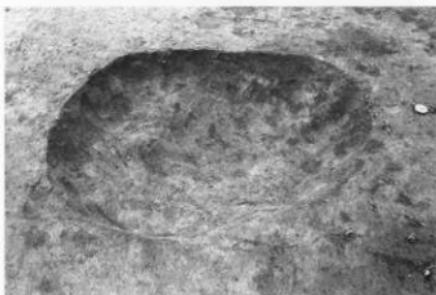
D072



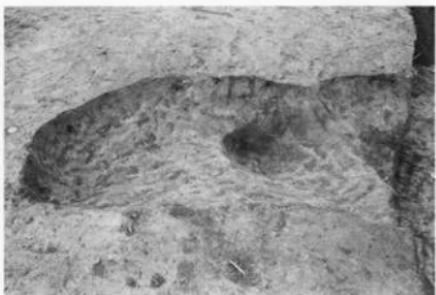
D073



D076

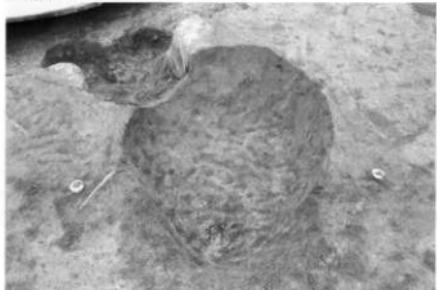


D077



D079

図版16



D082



D084



D085



D087



D089



D091



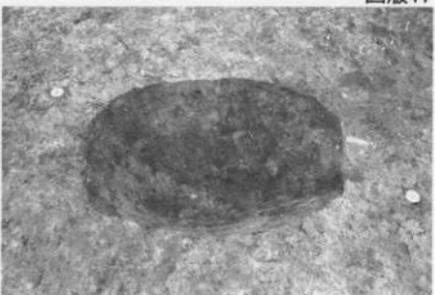
D097



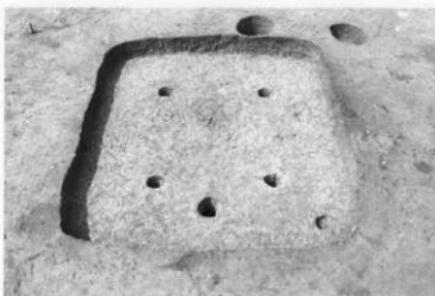
D098



D099



D100



A079



A081



D060



A073



A074



A075

図版18



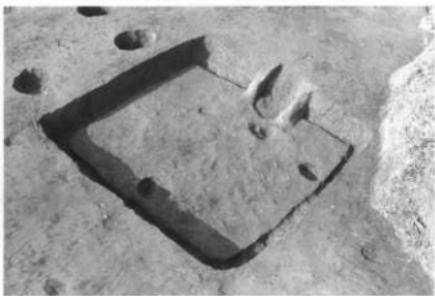
A076



A077a.b



A078



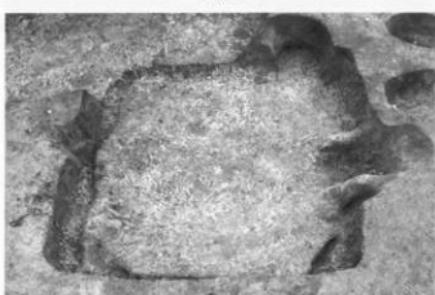
A080



A082



A083



A084



A085